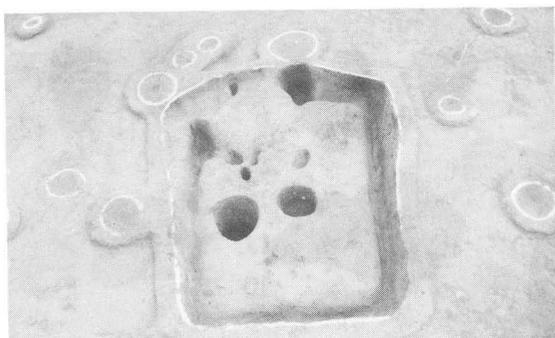


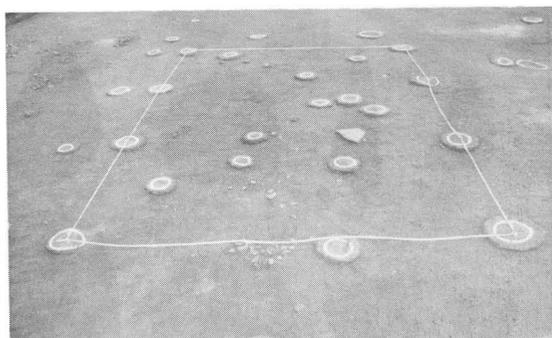
(49) 6号土坑 (北より)



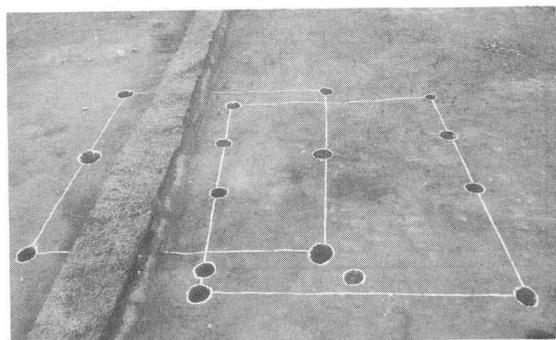
(53) 3号建物 (西より)



(50) 7号土坑 (北より)



(54) 4号建物 (西より)



(51) 1・2号建物 (北より)



(55) 5号建物 (北より)

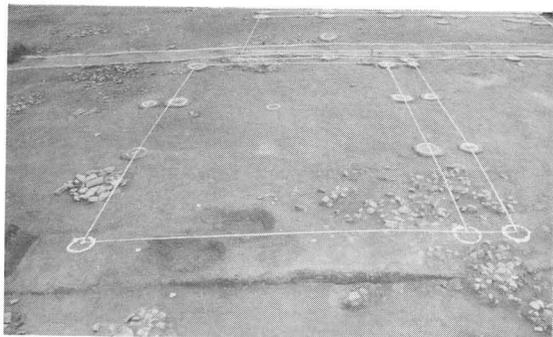


(52) V-7・8号建物群



(56) 6号建物 (西より)

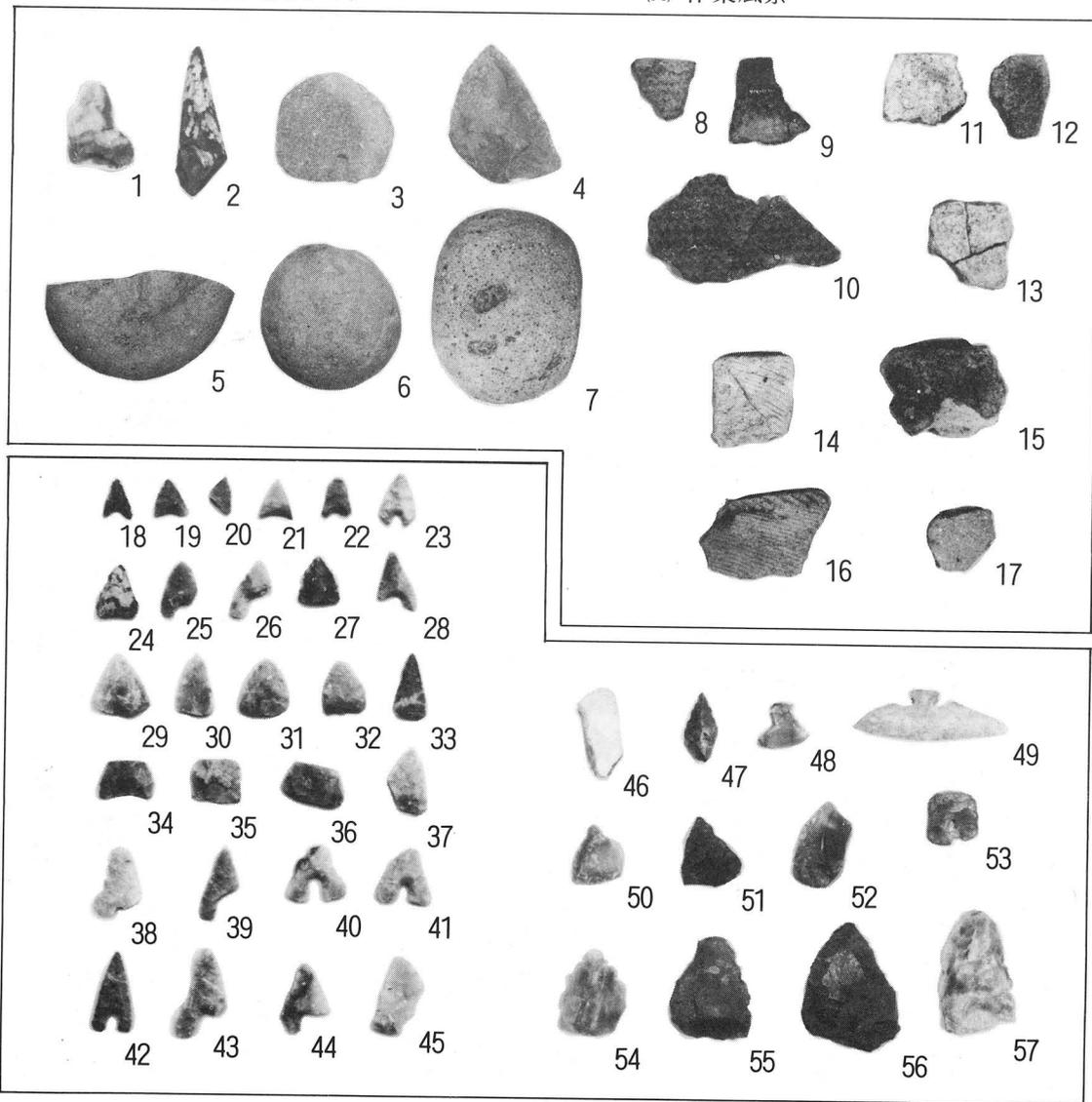
PL58



(57) 7号建物 (南より)

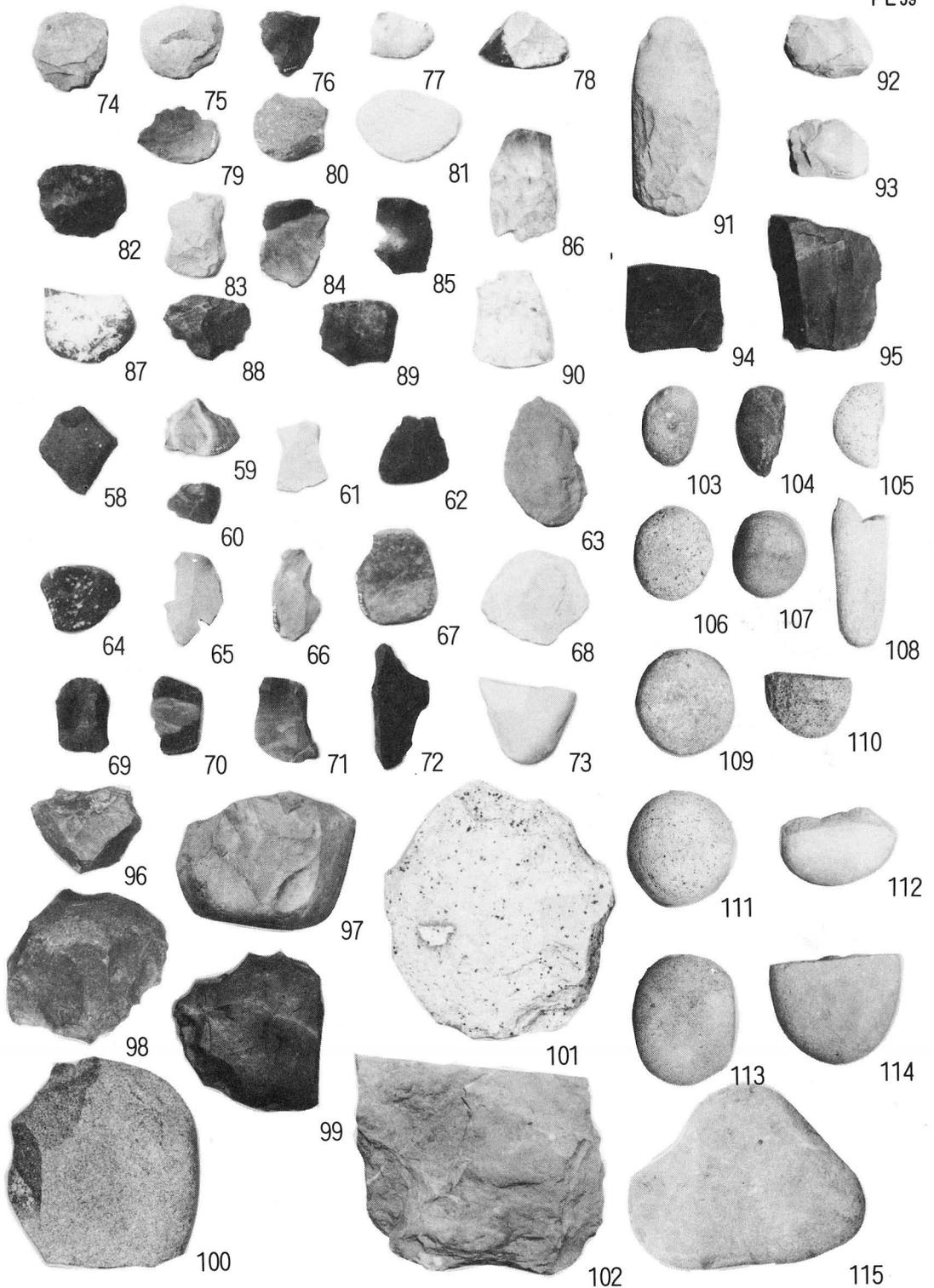


(58) 作業風景



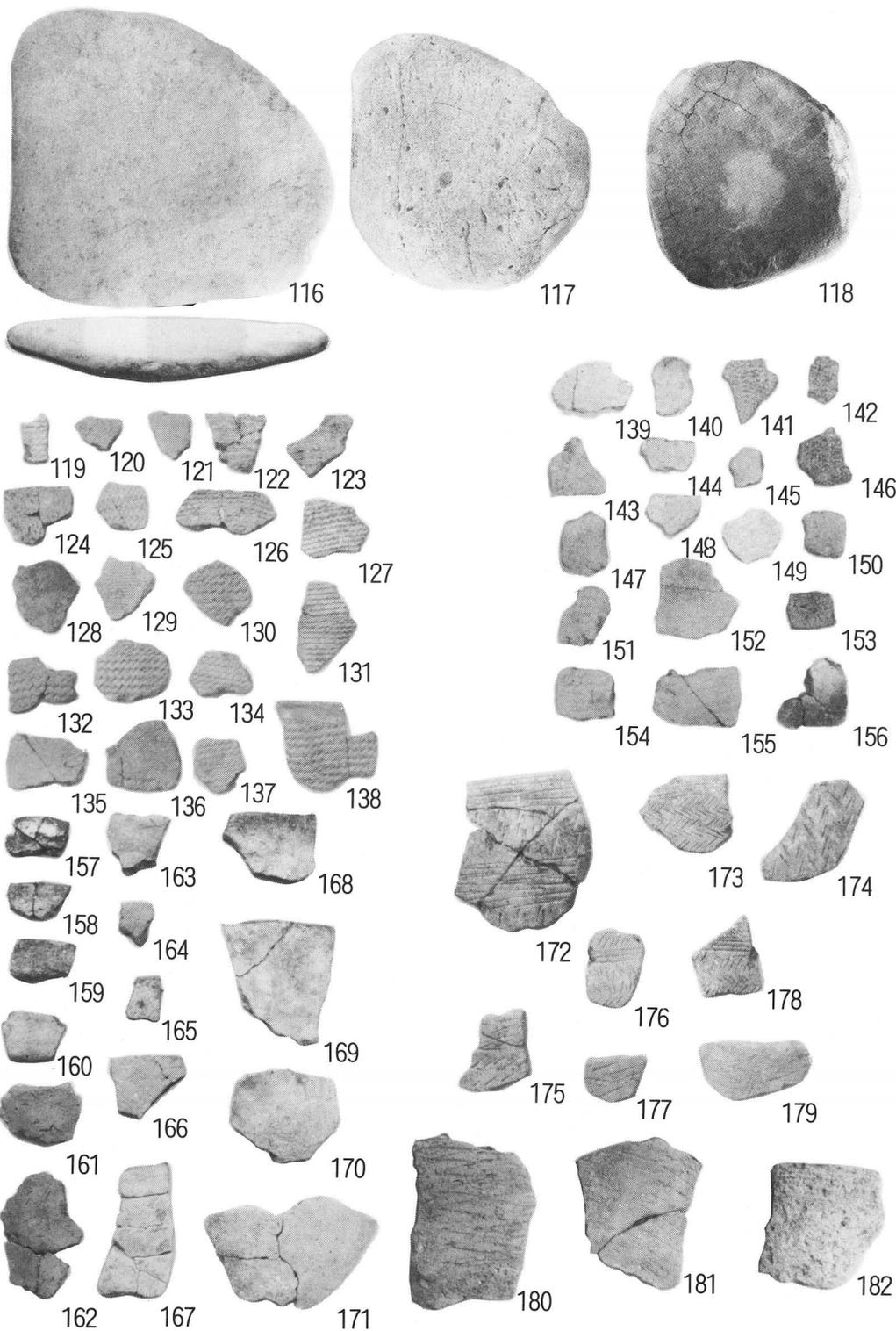
V区集石遺構出土遺物(中段)、V区出土石器①(石鏃・石匙等)

PL 59

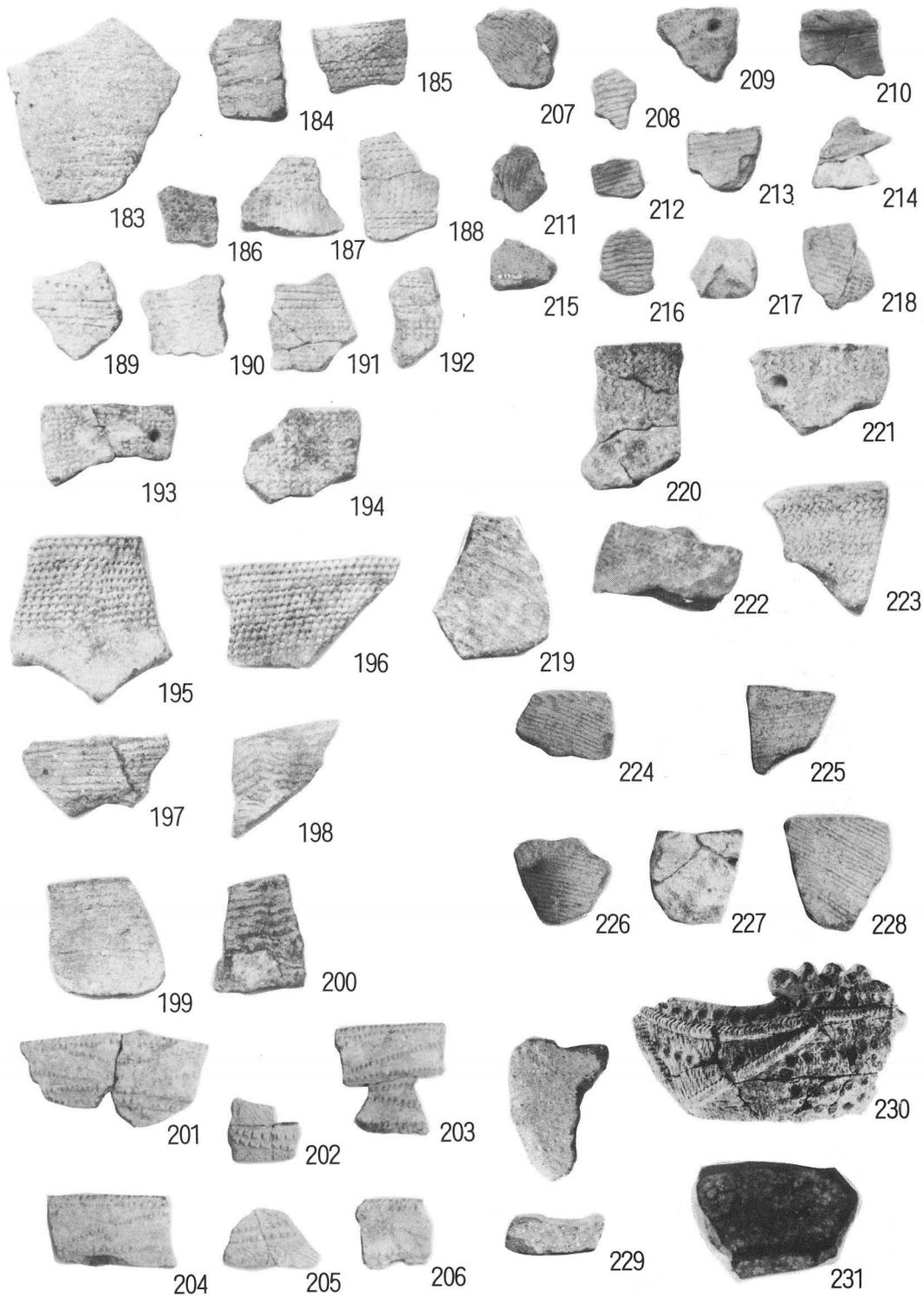


V区出土石器② (石斧・スクレイパー・敲打器等)

PL 60

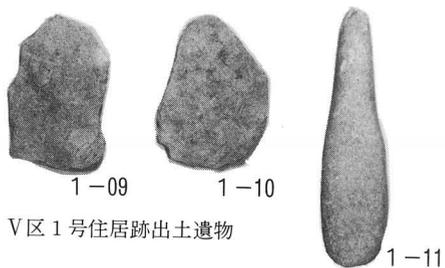
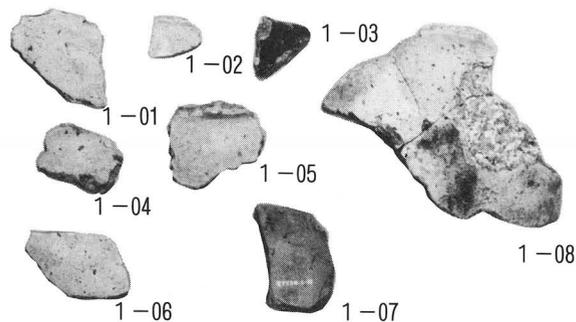


V区出土石皿及び縄文土器 (押型文・無文・貝殻円筒文)

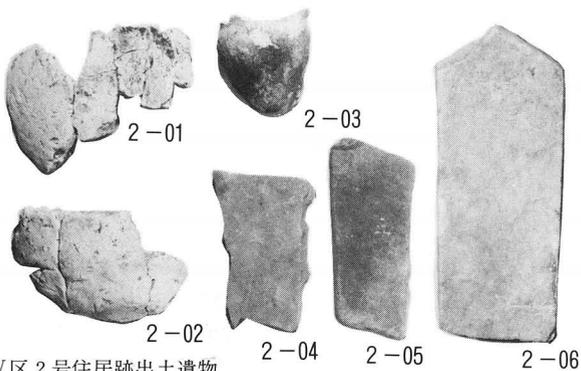


V区出土繩文土器（貝殼文円筒土器・平椀・船元等）

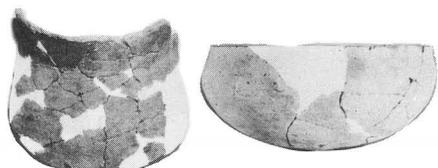
PL 62



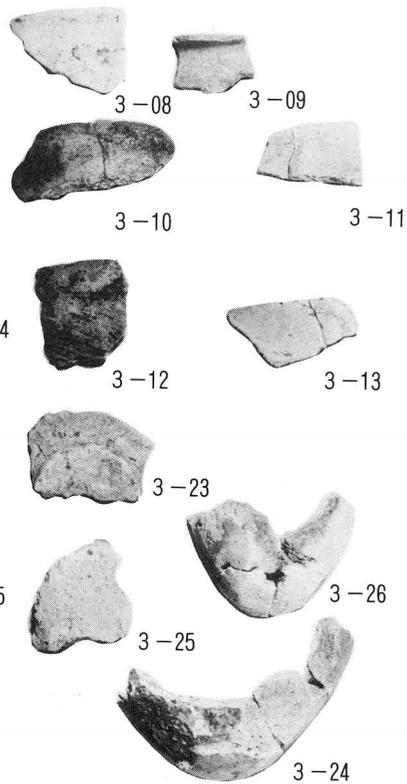
V区1号住居跡出土遺物



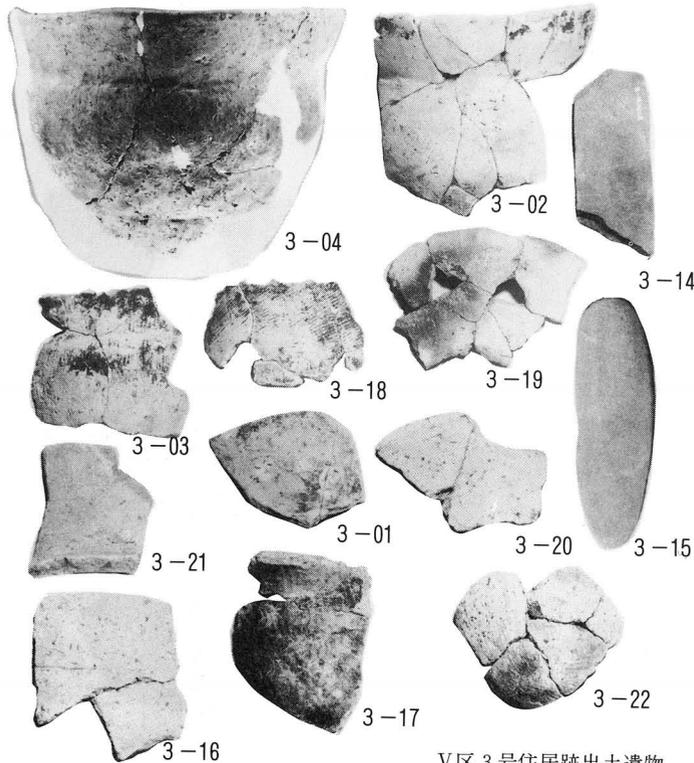
V区2号住居跡出土遺物

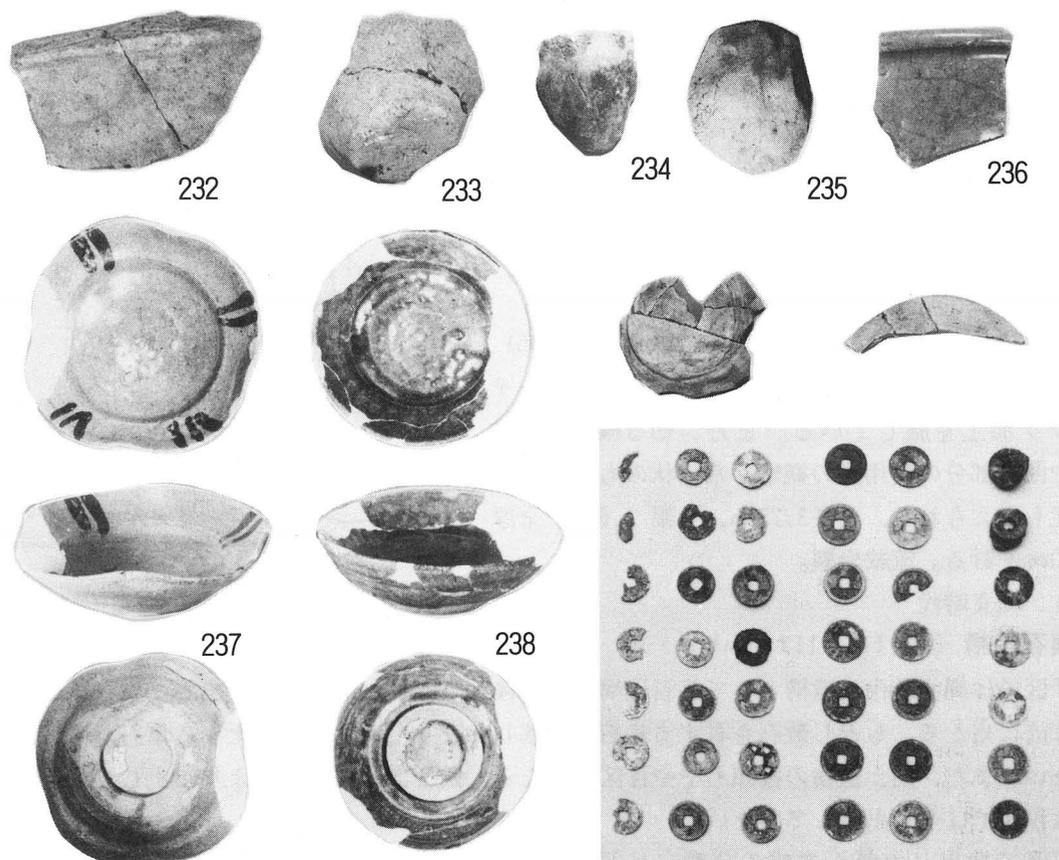


5号住居跡出土遺物



V区3号住居跡出土遺物





PL 63 V区出土弥生土器・古銭・陶磁器等

2. 層序

V区の層序は、各ヶ所とも基本的に相違は認められない。
V-13区ではⅢa層からV層の一部が削平されている。

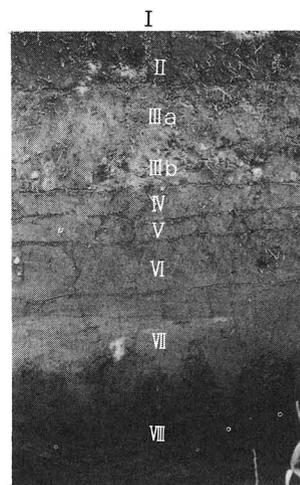
I層（表土層）

Ⅱ層：色調は赤みのある茶褐色を呈する。10～20cm。

Ⅲa層：明茶褐色土層。Ⅱ層とアカホヤの混じった層である。場所によっては堆積が認められない。5～20cm。

Ⅲb層：明褐色土層（アカホヤ層）。10～40cm。Ⅱ層より住居跡などが掘り込まれる。異状に厚く堆積する場所もある。

Ⅳ層：暗茶褐色土層。約10cm。縄文時代早期の遺物・焼け石などが出土している。



PL 64 V区層序

V層：暗褐色土層。約10cm。旧石器時代の包含層と思われるが、文化層として把握できなかった。粘質を帯びる。

VI層：砂礫混じりの粘質の黄茶褐色土。20～40cm。

VII層：砂礫混じりの粘質の黄褐色土。約20cm。

VIII層：黒褐色土層。3～5cmのブロック状。

3. 遺構と遺物

a. 旧石器時代 (PL58・Fig 114)

V区では、焼石に混じってナイフ形石器 (46) が1点出土した。横長の剥片の一侧辺にブランディング加工を施している。また、切る機能の他にやや凹む部分の使用痕の観察から棒状のものを削る機能も考えられる。全長3.75cm、全幅1.6cm、全厚0.9cmを計る。流紋岩製。

b. 縄文時代

集石遺構 (Fig 115～117・Tab 9・10)

V区では縄文時代の遺構として集石遺構を95基検した。これはV区で検出した集石遺構数のほぼ倍に当たる。しかし敷石を有する集石は39基しかなく、遺物等の出土する集石遺構も数が少ない。また、出土遺物の種類もややIV区と異なる。例えば、9号集石より出土した吉田系土器はIV区では全く出土していない。

V区で検出した集石遺構の分類にはVI区のものをもそのまま踏襲した。V区の集石はIV区と同じようにA₂・B₂タイプが大部分をしめる。また、Cタイプも少なくない。その他、IV区および他区で見られないタイプに、93号集石例および91号集石例がある。前者は敷石の下に斜方向の土壇が掘られ、中に多量の焼土がつまるものであり、後者はピットを有するものである。類例がなく機能等を含め詳細は不明である。

また、5号集石の横より石皿 (116) が出土した。

出土遺物には、石器類が使用痕を有する剥片 (1～4)、磨石・敲石 (5～7)、土器類が押型文土器 (14)、無文土器 (15・17)、吉田系土器 (16) 等である。石材は1がチャート、2と4は頁岩、3は流紋岩、5～7は砂岩である。

V区でも、住居跡や建物群等によってかなりの集石が片付けられていると思われるので、全体の傾向はつめないが、特に集中する地域とそうでない地域があるわけではなく、台地全体を利用した感がある。

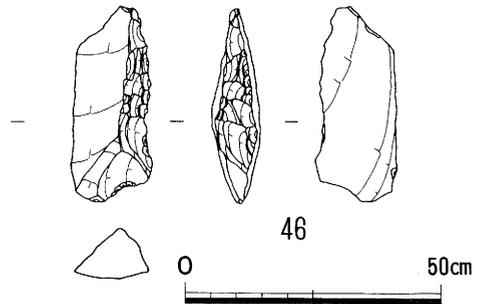


Fig114 V区出土遺物①ナイフ形石器(2/3)

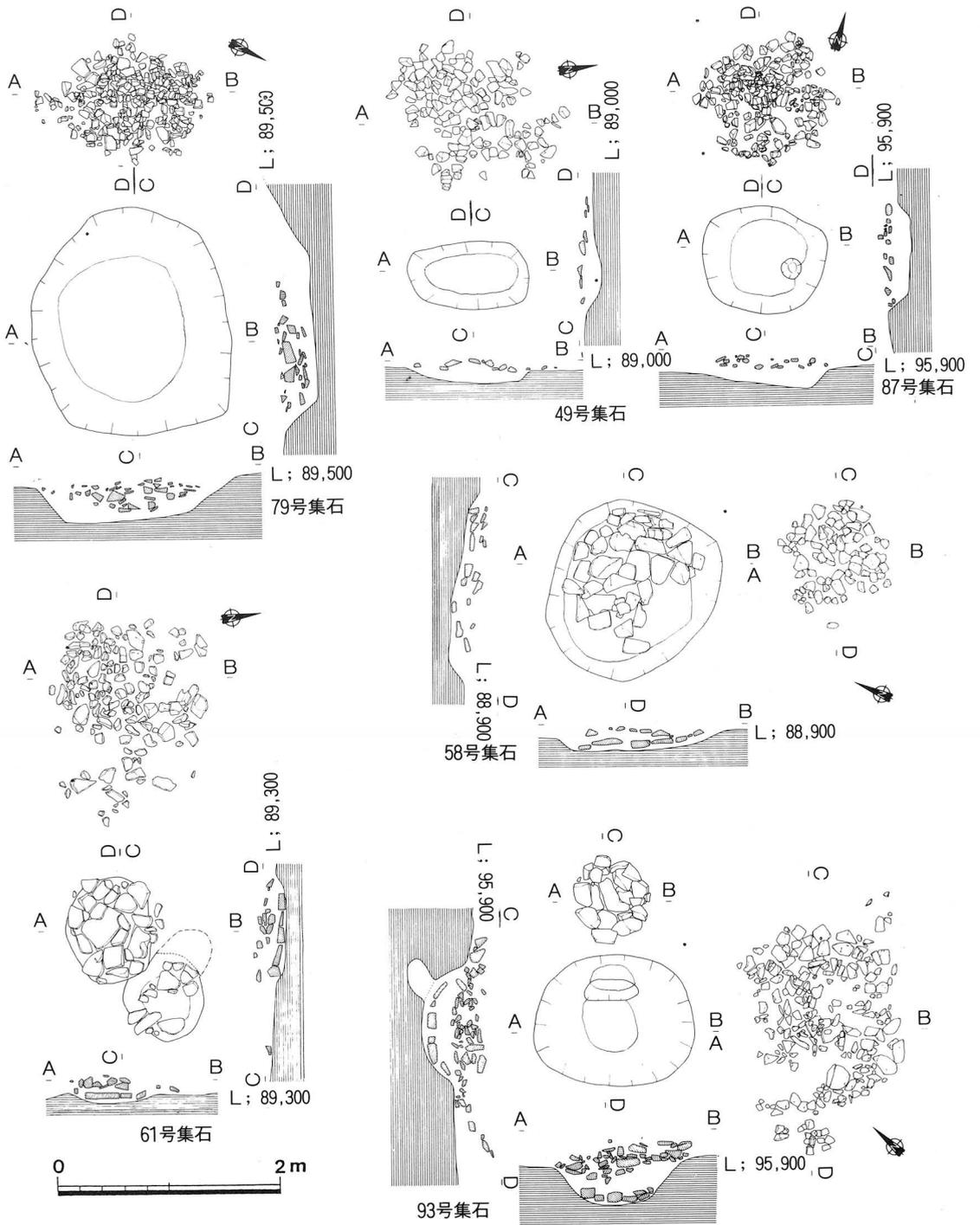


Fig 116 V区集石遺構実測図② (1 / 60)

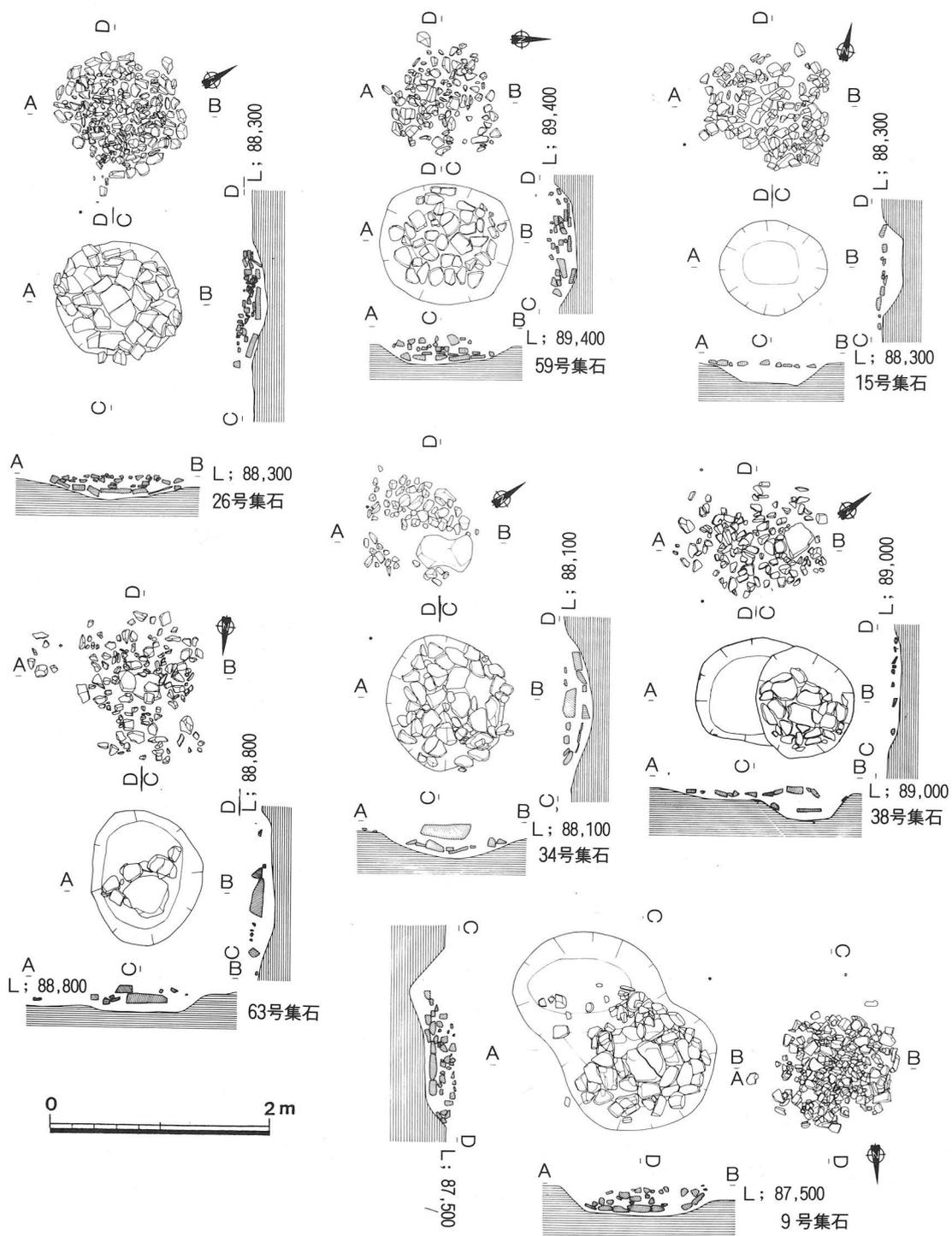


Fig 115 V区集石遺構実測図① (1/60)

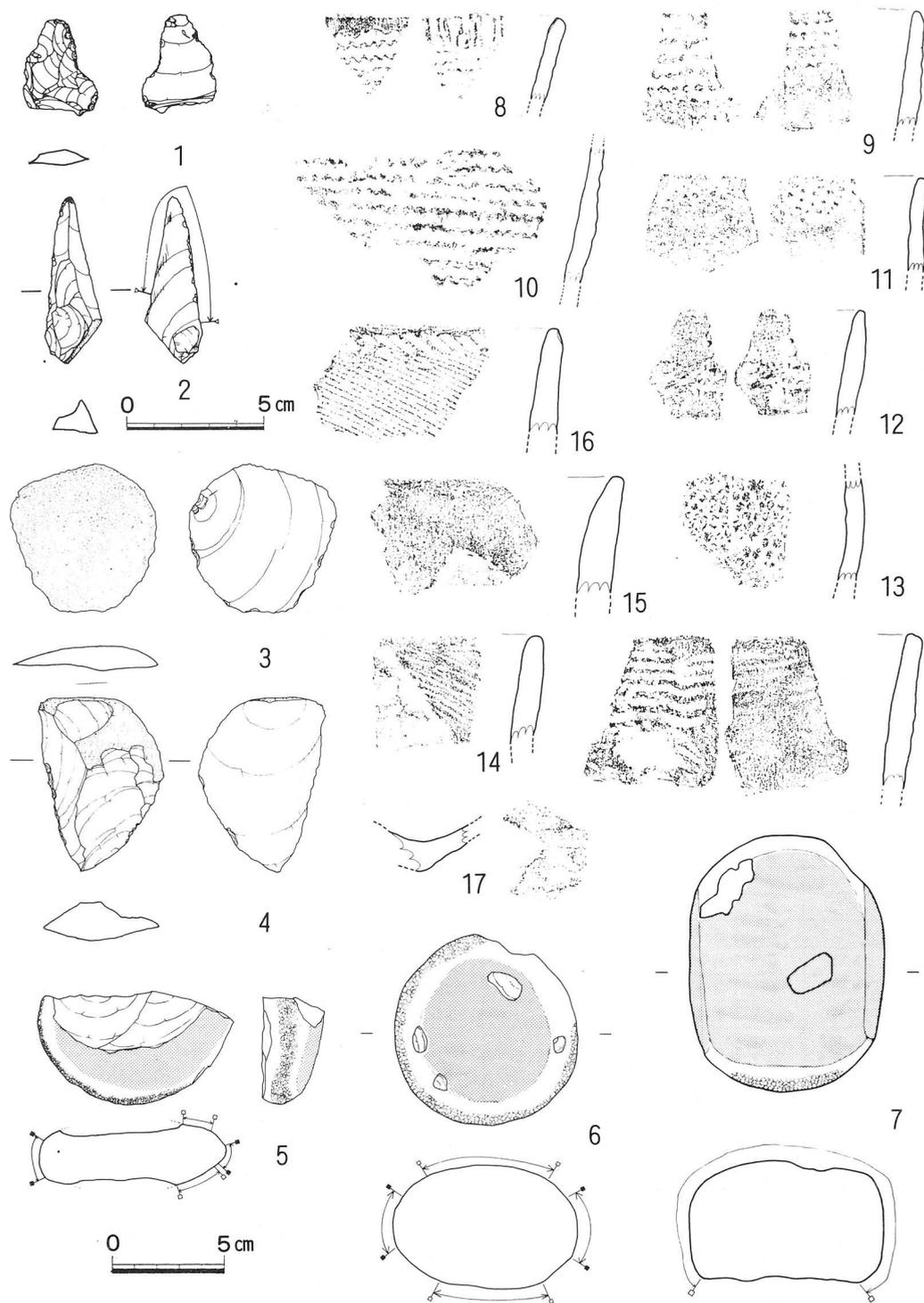


Fig 117 V区集石遺構出土遺物 …200を除く (2/5→1・2、他は1/3)

Tab 9 V区集石遺構計測表①

No	タイプ	検出規模 (長軸×短軸)	集石の 疎密	敷石の状態	上場 長×短(cm)	下場 長×短(cm)	深さ (cm)	出土 遺物	備考
1	A ₂	180×105	密	浅い皿状	119×95	45×33	28		
2	A ₂	226×106	疎	浅い皿状(?)	129×125	58×36	26		
3	A ₂	103×75	密	浅い皿状	100×87	56×51	19		
4	A ₁	122×104	密	浅い皿状	88×68	44×31	25		
5	A ₂	223×56	疎	真中に扁平礫	125×110	65×60	21	⑪⑭	
6	A ₂	143×74	疎	浅い皿状	114×102	72×53	26		
7	A ₂	96×54	疎	浅い皿状	118×98	38×32	29		
8	A ₂	116×72	密	浅い皿状	86×77	29×24	27		
9	A ₂	123×106	密	平たく扁平礫を敷く	210×140	170×85	42	⑯	横にV字状の掘り込み
10	B ₂	235×141	疎	—	144×128	73×68	30	⑬	
11	B ₂	121×101	疎	—	117×97	61×38	29	⑤	
12	B ₂	117×86	疎	—	128×114	56×43	19	⑫	
13	B ₂	226×104	疎	—	103×97	58×39	27		
14	A ₂	115×108	疎	角礫を配す	114×107	31×27	24		
15	B ₂	97×79	疎	—	81×58	37×19	25		
16	C	129×79	疎	—	89×80	45×29	13		近接する
17	C	80×59	疎	浅い皿状	79×71	42×40	18		
18	C	105×52	疎	—	89×74	39×37	11		22と近接
19	C	142×87	疎	—	×95	74×68	18		23と近接
20	B ₂	213×170	密	—	121×102	91×74	21		
21	B ₂	148×102	疎	—	135×122	95×69	28		
22	C	141×92	疎	—	113×105	75×68	20		22と近接
23	C	145×63	疎	—	124×107	68×65	28		19と近接
24	B ₂	106×95	疎	—	102×96	40×36	27		
25	B ₃	96×40	疎	—	83×59	39×19	25		掘込みは楕円形
26	A ₂	119×92	密	真中に扁平礫、浅い皿状	119×106	70×68	23	②	
27	A ₂	127×57	疎	扁平礫十角礫	100×82	53×50	25		
28	B ₂	84×46	疎	—	91×80	62×54	24		
29	B ₂	72×52	疎	—	56×51	31×29	11	①	
30	B ₂	91×62	疎	—	57×55	33×26	13		
31	C	144×130	疎	扁平礫まばら	175×138	119×90	16		近接する
32	C	150×73	疎	—	105×85	52×50	20	④	
33	A ₂	161×125	疎	真中に扁平礫	142×130	87×76	29		
34	A ₂	103×93	疎	真中に厚手の扁平礫、周囲に角礫	123×107	47×34	28		
35	A ₂	121×95	疎	真中に扁平礫	109×98	69×46	18		
36	C	250×97	やや密	扁平礫平らに敷く	130×116	70×68	20		くつつく A ₂
37	C	190×96	やや密	—	132×128	97×89	16		B ₂
38	A ₂	146×110	疎	真中に扁平礫浅い皿状	138×96	97×33	30		横に浅い土拵がつく
39	C	149×121	疎	角礫がかたまる	116×107	34×26	20		A ₂
40	C	192×127	疎	中央に扁平礫	148×126	66×60	18		B ₂
41	B ₂	203×98	疎	—	105×95	73×54	25		
42	C	157×120	疎	—	110×95	60×56	20		B ₂ 47号にくつつく
43	C	64×55	疎	—	90×86	51×49	14		B ₂
44	C	135×91	疎	扁平礫を平らに敷く	120×108	83×75	21	⑧	振り込みは円形(A ₂)
45	C	172×87	疎	真中に扁平礫	219×161	186×114	19		振り込みは不整形(A ₁)
46	B ₂	149×92	やや密	—	122×104	92×81	14		
47	C	170×80	疎	—	171×148	42×12	25		下線稜明確でない
48	C	145×72	疎	—	116×66	71×32	15		B ₃ 掘り込みは不整形

Tab 10 V区集石遺構計測表②

No	タイプ	検出規模 (長軸×短軸)	集石の 疎・密	敷石の状態	上場 長×短(cm)	下場 長×短(cm)	深さ (cm)	出土 遺物	備考
49	B ₃	165×111	疎	—	109×62	85×38	22		長方形の掘り込み
50	B ₂	151×61	疎	—	99×89	36×30	18		
51	A ₂	56×36	疎	やや浅い皿状	66×62	38×31	17		
52	A ₂	—	—	扁平礫を平らに敷く	87×77	41×34	14	⑦	溝で切られる
53	B ₁	179×116	疎	—	159×145	117×99	20		〃
54	A ₁	191×142	疎	真中に厚手の扁平礫	176×130	61×54	37		〃
55	B ₂	130×62	疎	—	85×79	57×39	13		
56	A ₂	—	—	真中に巨大な扁平礫を据える	90×70	61×44	12	⑨	
57	A ₂	102×82	疎	浅い皿状	99×87	53×43	15		
58	A ₂	127×83	疎	〃	171×141	130×118	25		
59	A ₃	117×95	疎	〃					
60	A ₂	110×80	疎	真中に厚手の扁平礫	98×79	62×33	20		横にピットが掘り込まれる
61	A ₁	157×102	やや密	真中に扁平礫、浅い皿状	166×73	123×39	26		
62	B ₂	170×122	やや密	—	115×110	69×61	23		
63	A ₂	140×90	やや密	人頭大の角礫	128×102	101×72	25	③	
64	B ₂	158×93	やや密	—	136×121	80×65	28		
65	A	110×70	疎	浅い皿状	123×105	76×71	15		中央の礫が抜かれている。
66	B ₃	184×87	やや密	—	158×120	118×70	27		掘り込みは楕円形
67	C	103×60	やや密	浅い皿状	81×71	36×30	13		68と近接する
68	B ₃	220×130	やや密	—	98×80	59×34	16		掘り込みは長楕円形
69	C	110×70	やや密	浅い皿状	83×70	34×28	19		67と近接する
70	B ₂	270×140	密	—	144×141	99×89	23	⑩	
71	B ₂	170×85	疎	—	121×126	90×81	21		
72	A ₂	171×81	疎	宙に扁平礫	103×89	44×30	25		
73	B ₁	170×86	やや密	—	173×142	107×82	20		
74	A ₂	122×85	疎	浅い皿状	101×68	45×28	12		
75	A ₃	120×60	疎	薄い扁平礫(宙にうく)	103×89	60×18	28		西側がピット状に掘り込まれる
76	B ₁	154×125	やや密	—	125×121	65×59	38	⑥	
77	A ₁	309×138	密	—	169×127	116×86	24		
78	B ₁	159×117	密	中央に人頭大の扁平な礫を敷く	192×173	129×109	39		
79	B ₂	155×99	やや密	—	217×178	137×111	36		
80	B ₁	163×91	やや密	—	131×115	79×67	30		
81	B ₂	240×154	密	—	151×144	116×106	32		
82	B ₁	141×102	やや密	—	128×122	90×81	29		
83	B ₂	221×178	密	—	157×127	94×68	33		
84	B ₂	177×121	やや密	—	127×114	83×55	28		
85	A ₂	196×125	やや密	—	146×115	93×83	34		
86	B ₃	104×92	疎	厚手の扁平礫を平らに敷く	138×120	103×81	25		
87	B ₃	124×103	密	—	114×101	74×68	25		ピットを有する
88	B ₃	165×84	疎	—	140×110	102×74	34		
89	B ₂	213×89	疎	—	216×112	63×59	24		
90	B ₂	132×109	疎	—	168×139	66×55	41		ピットを有する
91	B ₃	230×135	やや密	—	109×100	45×43	35		
92	B ₂	203×144	疎	—	166×155	109×76	33		ピットを有する
93	A ₂	250×84	やや密	—	147×121	57×46	54		敷石の下の斜方向の穴 (焼土がびっしり詰まる)
94	A ₂	119×104	疎	厚手の扁平礫を平らに敷く	105×99	50×42	20		不成形の掘り込み
95	A ₂	—	—	浅い皿状	69×65	46×44	11		

石 器

石鏃 (PL58・Fig 118)

石材は24の安山岩を除き、外は全てチャートを使用している。形態別に凹基式、平基式、円基式の三種類がある。

凹基式 (18、22～23、25～26、28、38～45) 22は将棋の駒形を呈する。23は脚部端を意識的に除去している。26・40～41は鍬形鏃と称されるものである。18は主要剥離面を残す。

平基式 (19、21、24)

19、24はやや荒い加工を施す。断面は三角形を呈す。21は主要剥離面を残す。扁平な剥片の縁部を加工したものである。

円基式 (29、31～32、34～37)

尖頭状石器とも呼ばれる一群で、主要剥離面を残すものもある。石材の都合からか断面が三角形を呈する荒い加工のもの (29、35) もあるが、作りは全体に丁寧である。

小型石器・その他の石器 (PL58～59、Fig 118～119・47～57)

47は両面に細かい加工を施した石器で、主に刺突に利用したものと思われる。チャート製。48は分銅形の剥片の一部を加工したもので、類例はⅣ区でも出土している。小型のスクレイパーと思われる。チャート製。49はほぼ左右対称形を成し、中央部につまみをもつ横型の石匙である。主要剥離面が残る。つまみ下部は両方から挟りが入る。安山岩製である。54・55は全周を丁寧に加工したもので、石錐あるいはスクレイパー的な要素が考えられる。チャート製。51も同一機能が考えられる。主要剥離面を残す。安山岩製。52はスクレイパーである。切断によって指押さえ部を作っている。主要剥離面を残す。チャート製。53は自然風化によってできた穴のあいた頁岩製の剥片を加工して方形に仕上げたもので、スクレイパー等々に使用された痕跡は認められない。装飾品的な要素が強い。55～57はスクレイパーである。55は全周に丁寧な加工が施されるが、56・57は素材の制限をうまく利用している。55は流紋岩、56は頁岩、57はチャート製である。

使用痕を有する剥片 (PL59、Fig 120)

半面が自然面のいわゆるファーストフイク使用のもの (58、63、64、68、93)、一部自然面が残る部分を指押えとして対辺を刃部として使用するもの (64・67・70・72)、打面を有する縦長の剥片を利用するもの (65、66、69、71)、不整形の剥片を利用するもの (59、60、61、62) などがある。石材は63・68が砂岩、69が頁岩、72・73が安山岩で、他は全て流紋岩を利用している。

スクレイパー (PL59、Fig 120)

半面が自然面のいわゆるファーストフレイクの周縁を加工したもの (80～82・87・90)、打面が自然面の剥片の周縁を加工したもの (75・84～86・88・89)、打面を有する剥片を加工したもの (76・77・83)、不成形の剥片の一部を加工したもの (78・79) 及び全周を表裏くまなく加工したもの (74) がある。石材は74が礫岩、75が砂岩以外は全て流紋岩を利用している。

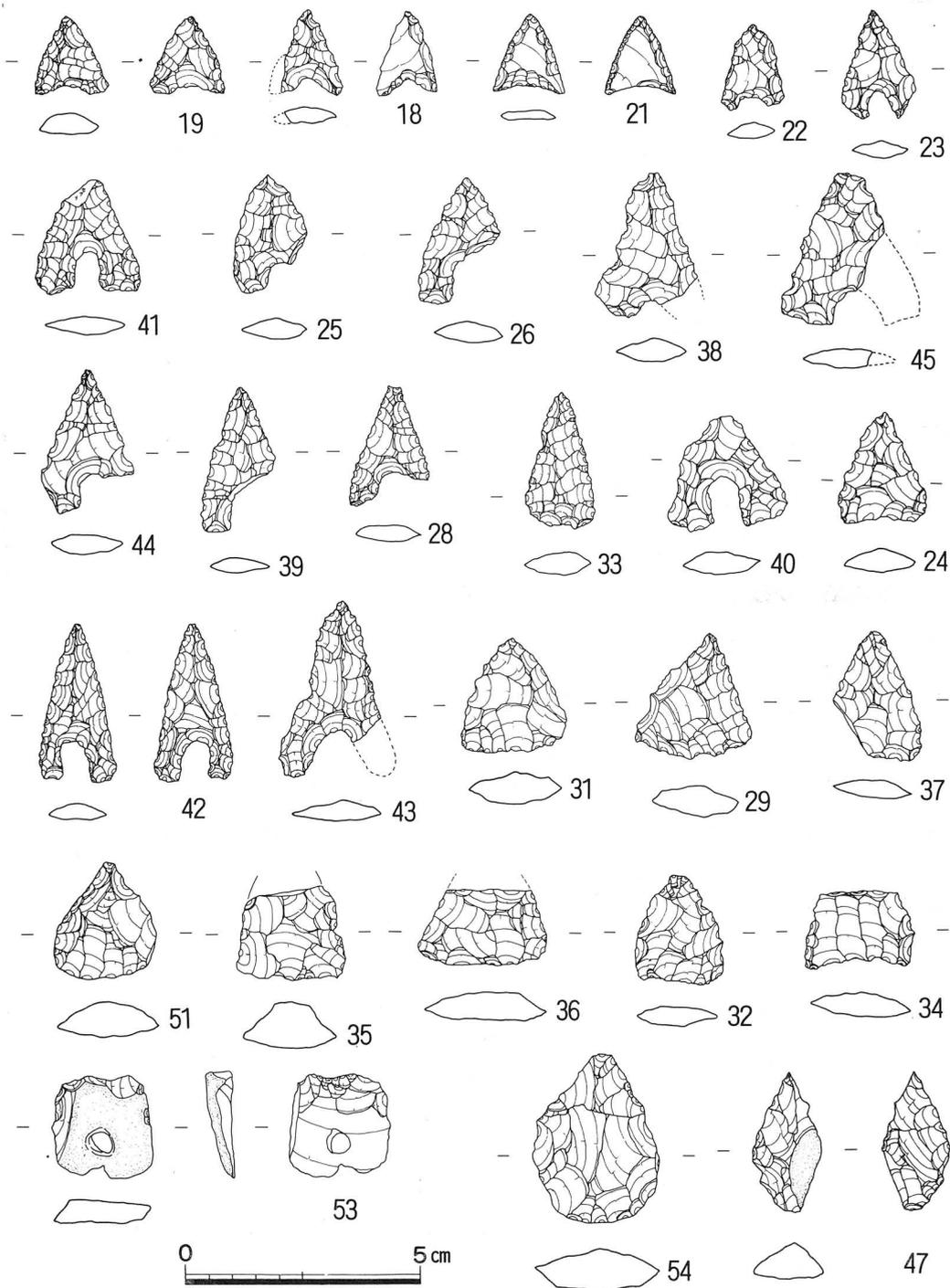


Fig 118 V区出土遺物②石鏃・尖頭状石器他 (2/3)

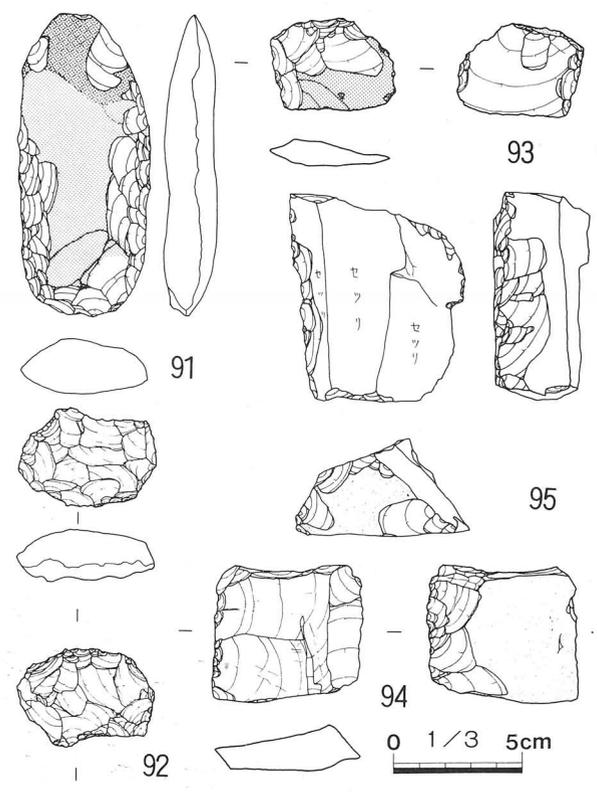
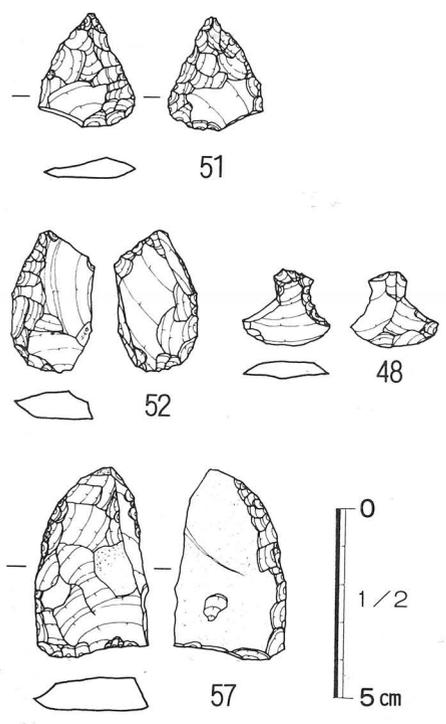
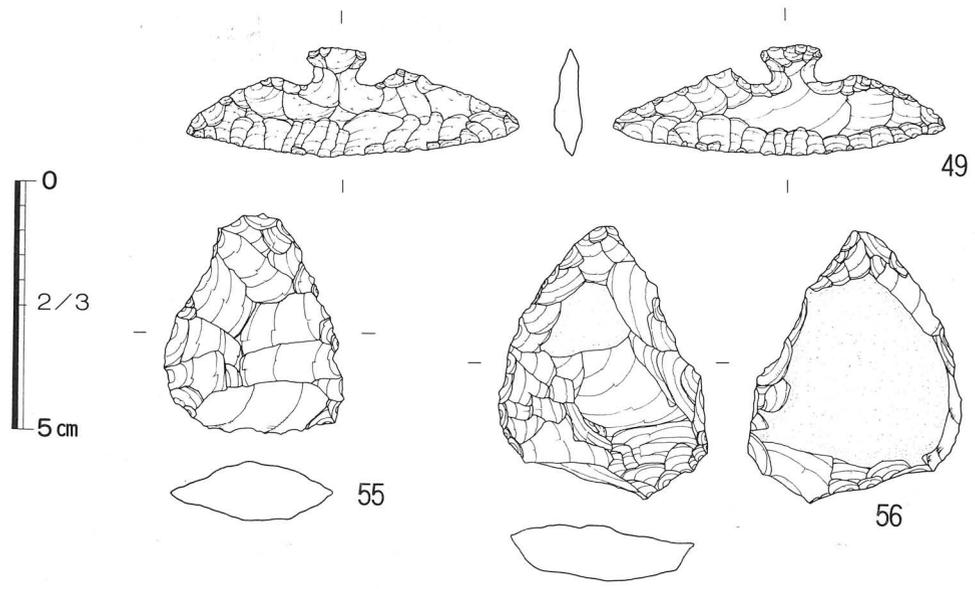


Fig 119 V区出土遺物③石匙・石斧他 (1/2・1/3・2/3)

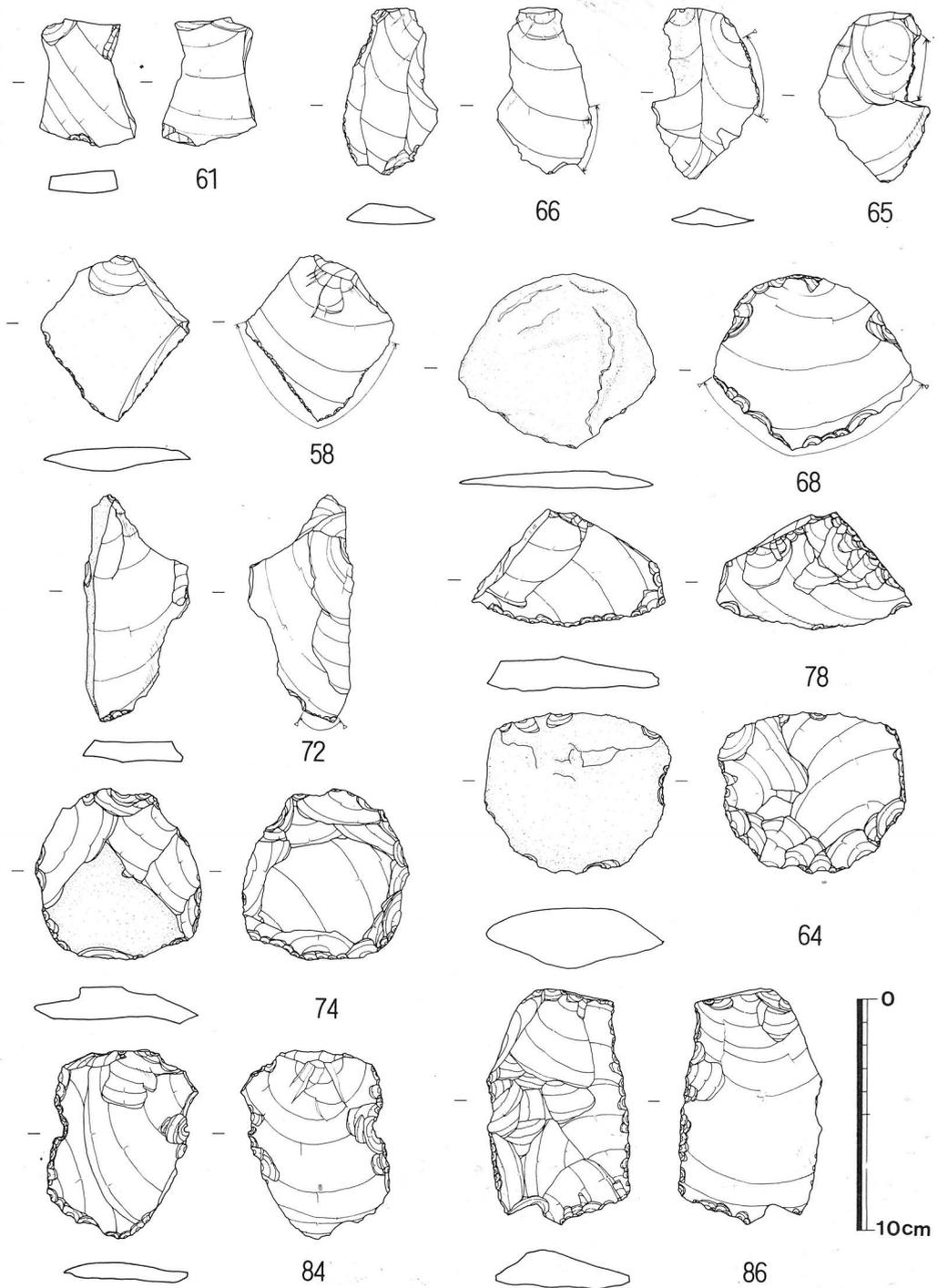


Fig 120. V区出土遺物④使用痕を有する剝片・スクレイパー (1/3)

磨製石斧 (PL59, Fig 119・91)

一部剝離痕を残す磨製石斧で刃部の作りは雑である。片面の研磨は丁寧に行なう。基部の研磨は丁寧に施す。最大長12.2cm、最大幅 5.2cm、最大厚 1.9cmを計る。砂岩製。

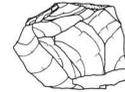
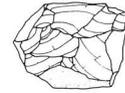
磨製石器 (PL59, Fig 119・92・93)

打面を有する横広の剥片の一部に丁寧な研磨を施す石器で、刃こぼれが一部に残る。また両サイドに調整痕を有する。流紋岩製。

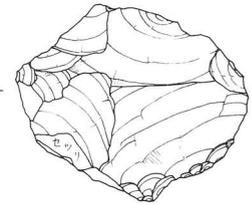
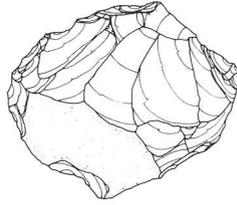
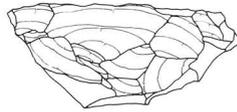
二次加工を有する石器

(PL59, Fig 119, 92・94~95)

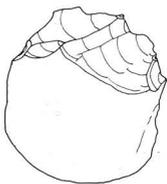
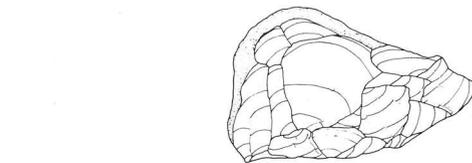
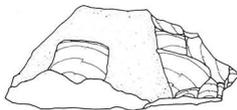
92は厚手の剥片の全面に加工を有する石器で、凹部に使用痕が顕著に見られる。棒状の加工に用いられたものと思われる。流紋岩製。94と95は頁岩製の剥片に荒い加工を施すものである。94は削器としての機能が予想される。95は一部端部に使用痕が認められる。割砕あるいはスクレイパー的な機能が予想される。



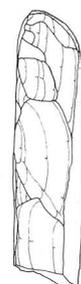
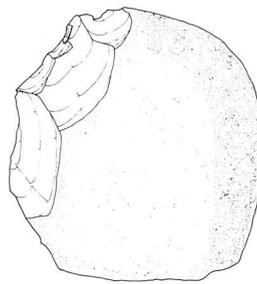
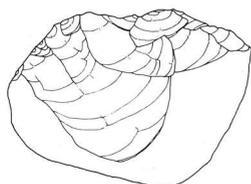
96



98



97



100

Fig 121 V区出土遺物⑤石核・礫器 (1/3)

石核 (PL59、Fig 121、96~98)

いずれも流紋岩製。96は頻繁に打面を転移させて、剥片をとった石核で、98と99は交互剥離によって剥片をとったものである。

礫器 (PL59、Fig 121~122、99~102)

99は頁岩の節理面をうまく利用し、両面から加工を施している。頂部に使用痕が顕著に認められる。100は扁平な砂岩礫の曲り部を指押えとして残し、全体の3分の2に加工を施す。101は片面に自然面を有する剥片の周囲を加工した礫器で、握部は荒く加工し、打撃部に細かい加工を施す。花崗斑岩製である。102は方形の薄い剥片の周囲を粗く加工した石器で、下部はゆるく内湾する。頁岩製。

磨石・凹石・敲石 (PL59、Fig 123、103~115)

103と110は片面に凹部をもち、113は両面に凹部をもつ。敲打痕のみをもつものは103・108で、磨石のみの機能をもつものは112である。

他は一面あるいは両面を磨石として使用し、一端あるいは周縁部、ときには全周を敲石として利用している。石材は103が凝灰岩、104が頁岩、105・109~112が花崗斑岩、他は砂岩である。106は礫岩。

石皿 (PL60、Fig 123、116~118・241)

いずれも、扁平な河原石の一面を石皿として利用している。116は5号集石の横で出土した。中央部がやや凹む。117と118は凹みが顕著でない。石材は116と118が砂岩製で、117礫岩である。

241は半分程欠けている。両面を使用する。花崗斑岩製。

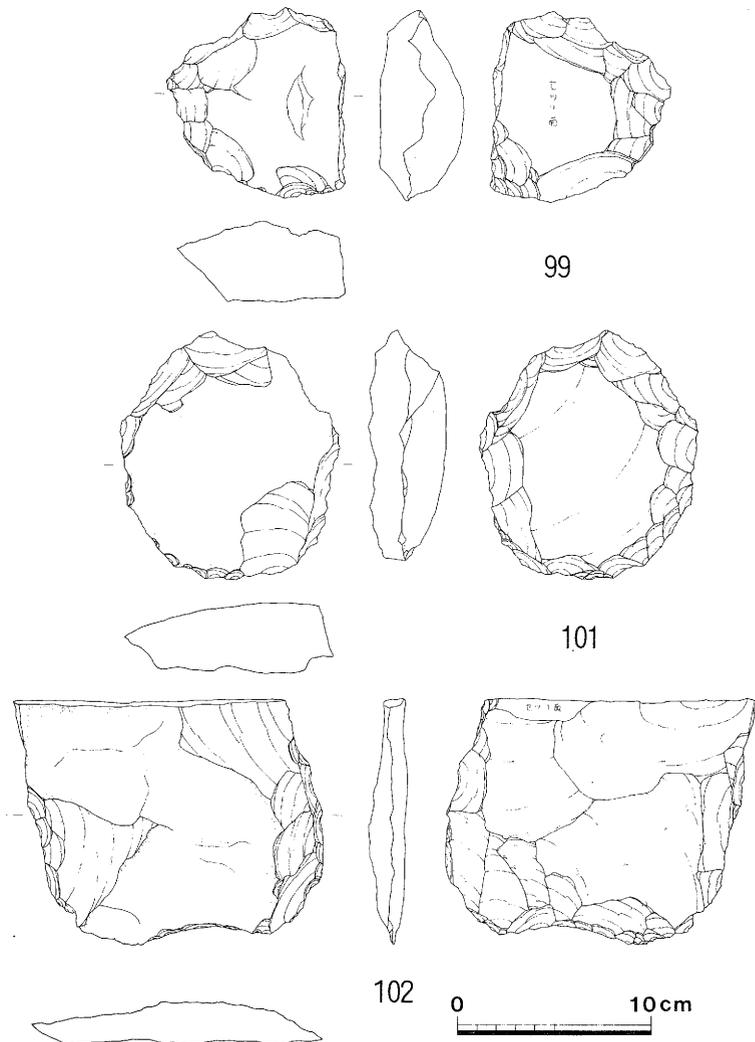


Fig 122 V区出土遺物⑥礫器 (1/4)

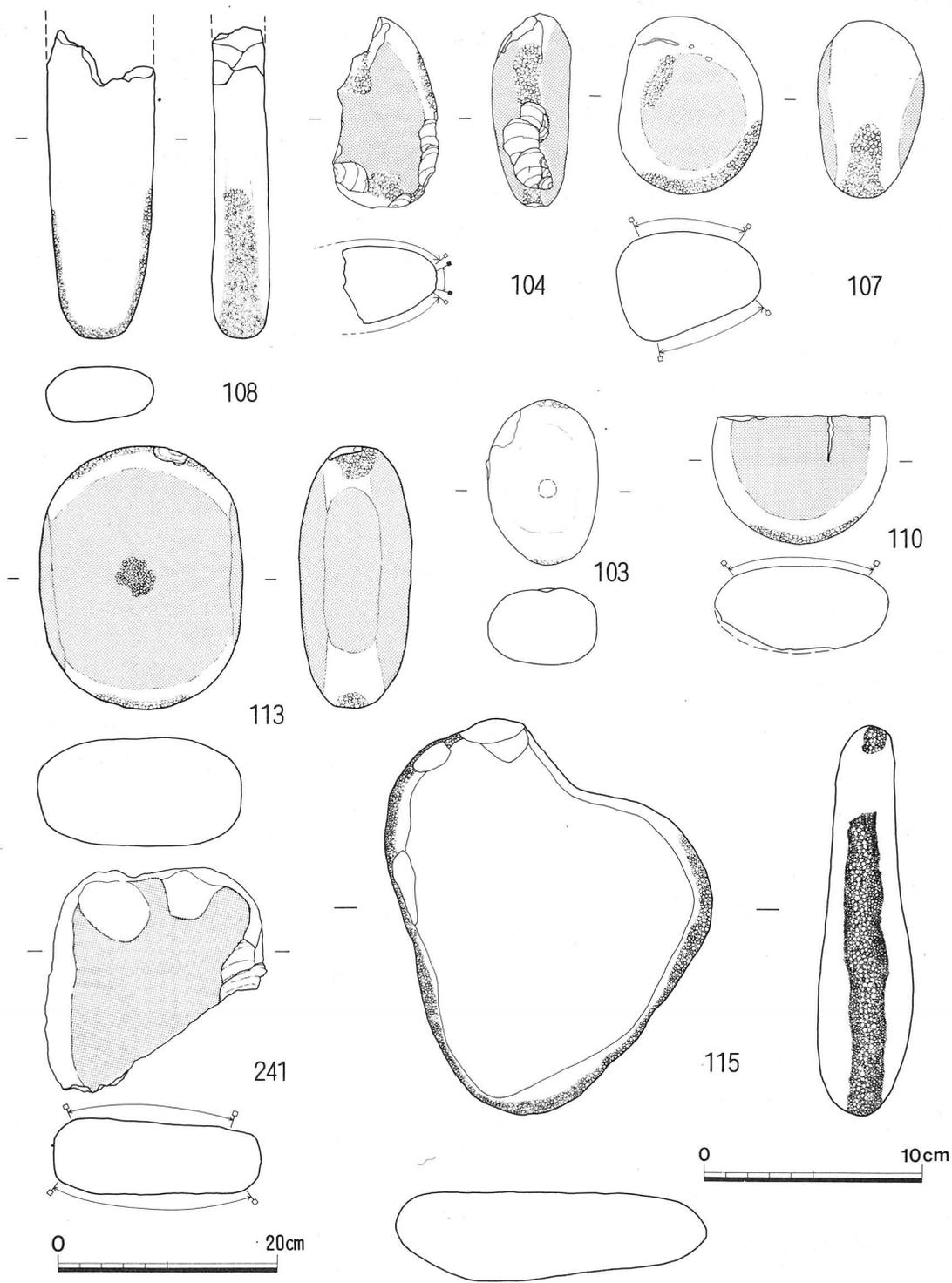


Fig 123 V区出土遺物⑦磨石・敲石・凹石・石皿 (1/3・1/6→241)

土 器

V区では、アカホヤ層下より押型文・貝殻文円筒土器をはじめとする縄文早期の土器群と、住居跡内あるいは木根等による攪乱土中より中期の船元式土器、後期の所産と考えられる土器、晩期浅鉢の口縁部などが出土した。

押型文土器 (PL60、Fig 124・125)

山形押型文土器 (119~138)、楕円押型文土器 (139~155)、格子目押型文土器 (156) が出土した。Ⅳ区に比べやや量的に劣っている感がある。

山形押型文土器には、施文を縦方向に行うタイプは 124の1点のみで他は横方向に施文する。124 は口唇部裏側に横文向に原体ころがしを施す。口縁部はやや外反する。127 も同様である。119、122、123 は口唇部内側に原体条痕を施しその下に横方向の原体ころがしを行う。138 は口唇部が外反し、内側に原体条痕を施し、その下に横方向の原体ころがしを行うものである。表口唇部下は指ナデ調整を行う。

V区では口縁部が外反する楕円押型文は出土していない。141 は口縁部が外上方にやや内湾ぎみに開く楕円押型文土器で口縁部端に指ナデ調整を施す。内側に原体ころがしによる施文を行う。142・156は同じ口縁部内側に原体ころがしを行うタイプである。また、内側の調整を指ナデでなく貝殻条痕を使った例 (152 など) もある。

笠下では格子目押型文の出土例は極めて少ない。V区で出土した格子目押型文はⅥ区のそれより目がやや荒い。

無文土器 (PL60、Fig 125・157~171)

無文土器は薄手のもの (168 など) と厚手のもの (171 など) の2タイプがある。薄手のものには口縁部が直行するもの (168 など) と外反するものの2タイプがあり、前者はさらに口唇部断面が丸くなるもの (168 など) と四角形様を呈するもの (160・164など)、口唇部のみ細くなるもの (159) がある。口唇部断面形が四角形になるものには、さらに刻目を施すもの (166・166など) がある。

貝殻文円筒系土器 (PL60、61、Fig 117・126、172~200・220~229)

172~179は貝殻腹縁で口縁下より線引きで区画割を行ない、その間を斜方向に刺突による施文を施すものである。180~181は貝殻腹縁文を胴部に菱形状に施文したものである。182~197~200・219は口縁直下に貝殻腹縁による沈線文を横あるいは斜方向に施すものである。波状のもの (198・200) もある。183・192は貝殻腹縁で横方向に線引きをし、その間を貝殻刺突文を施すものである。193・196は口唇部下に貝殻押引文を施すものである。器壁は厚い。193 には穿孔痕跡が認められる。220~223は貝殻腹縁による刺突文を横方向に数条施すものである。224~228はいわゆる吉田系土器に属するもので、胴部に貝殻条痕をもち口縁直下にヘラ様工具による押圧文を持つものである。229 は平底の土器底部である。

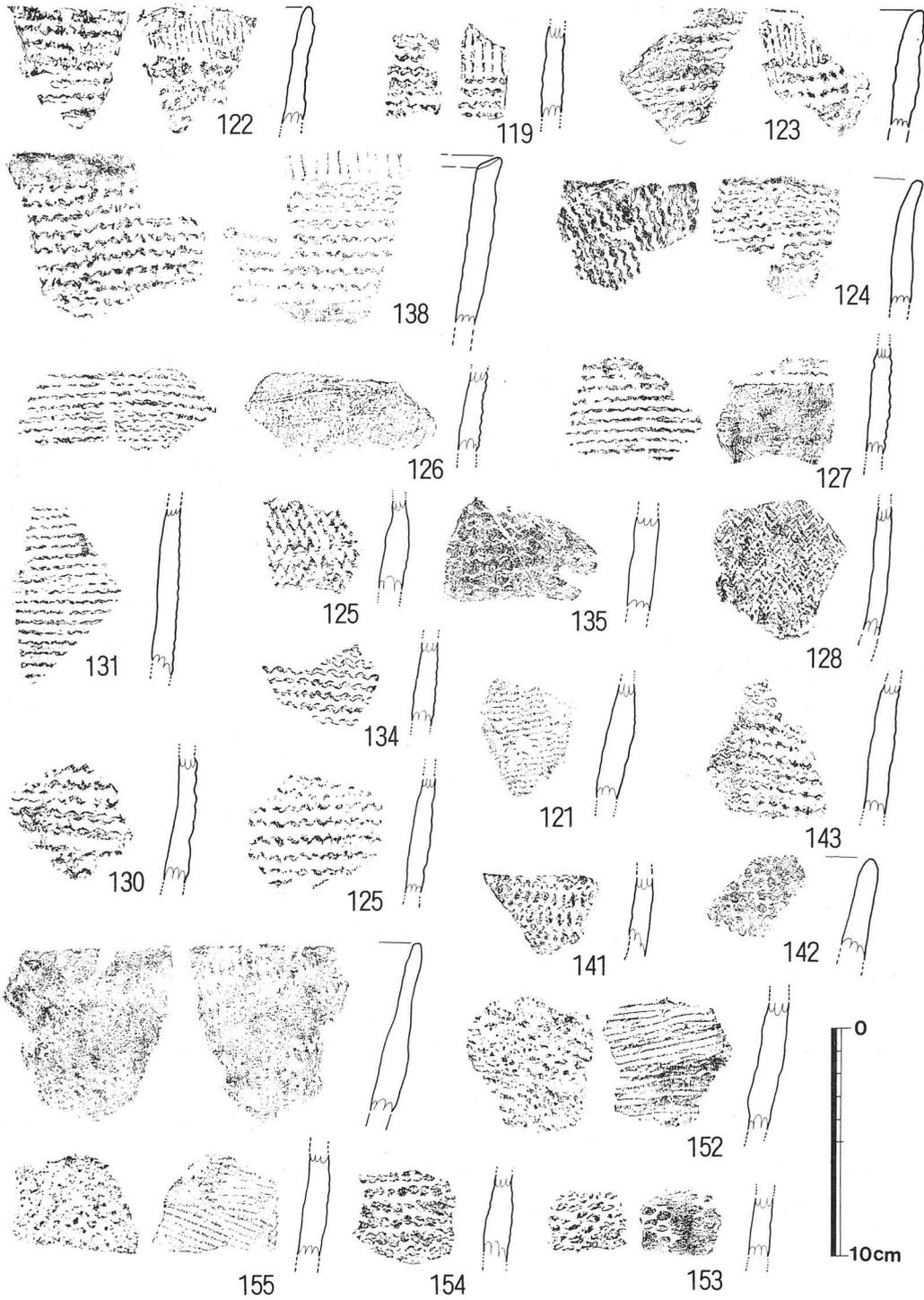


Fig 124 V区出土遺物⑧押型文土器 (1 / 3)

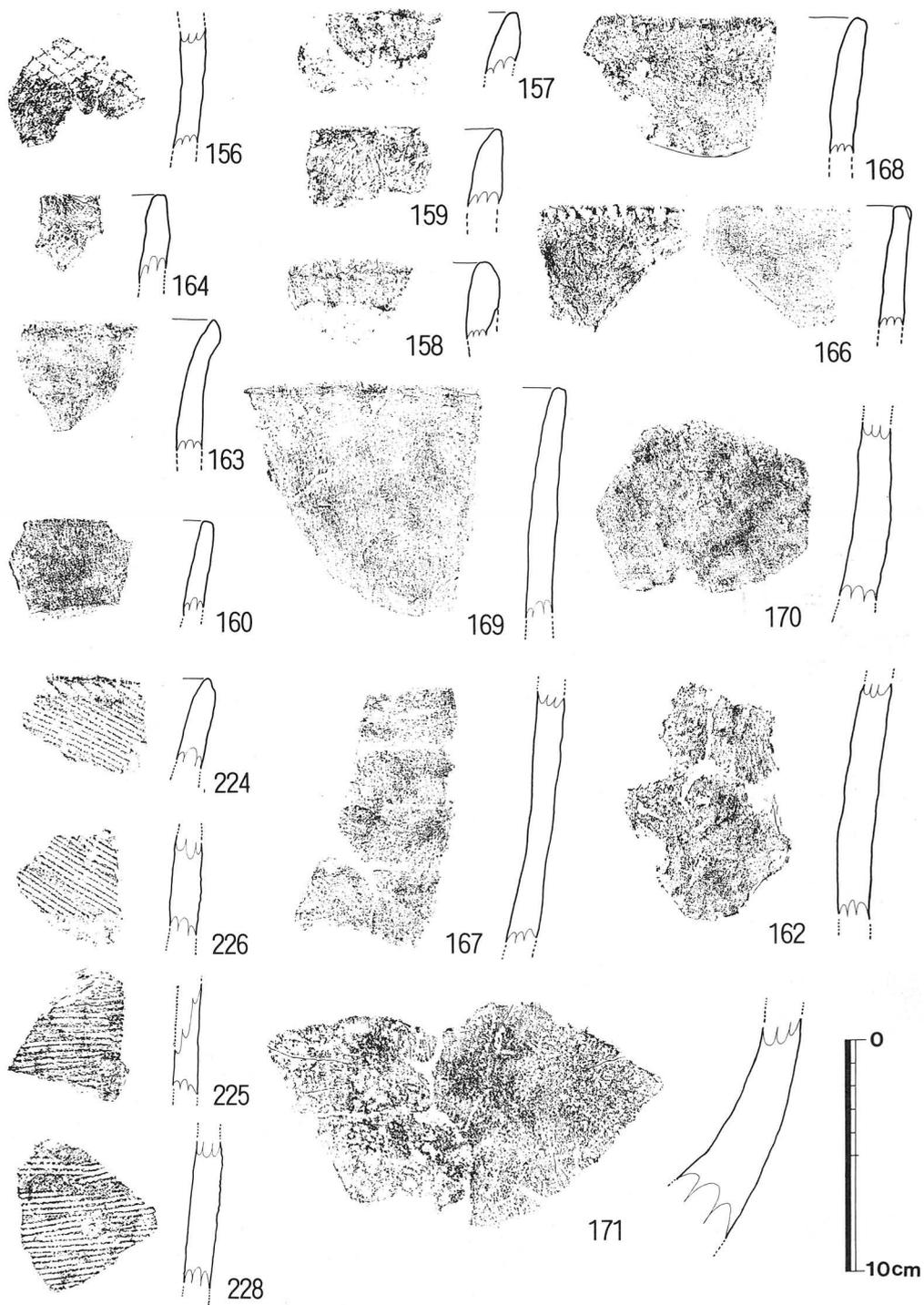


Fig 125 V区出土遺物⑨無文土器 (1/3)

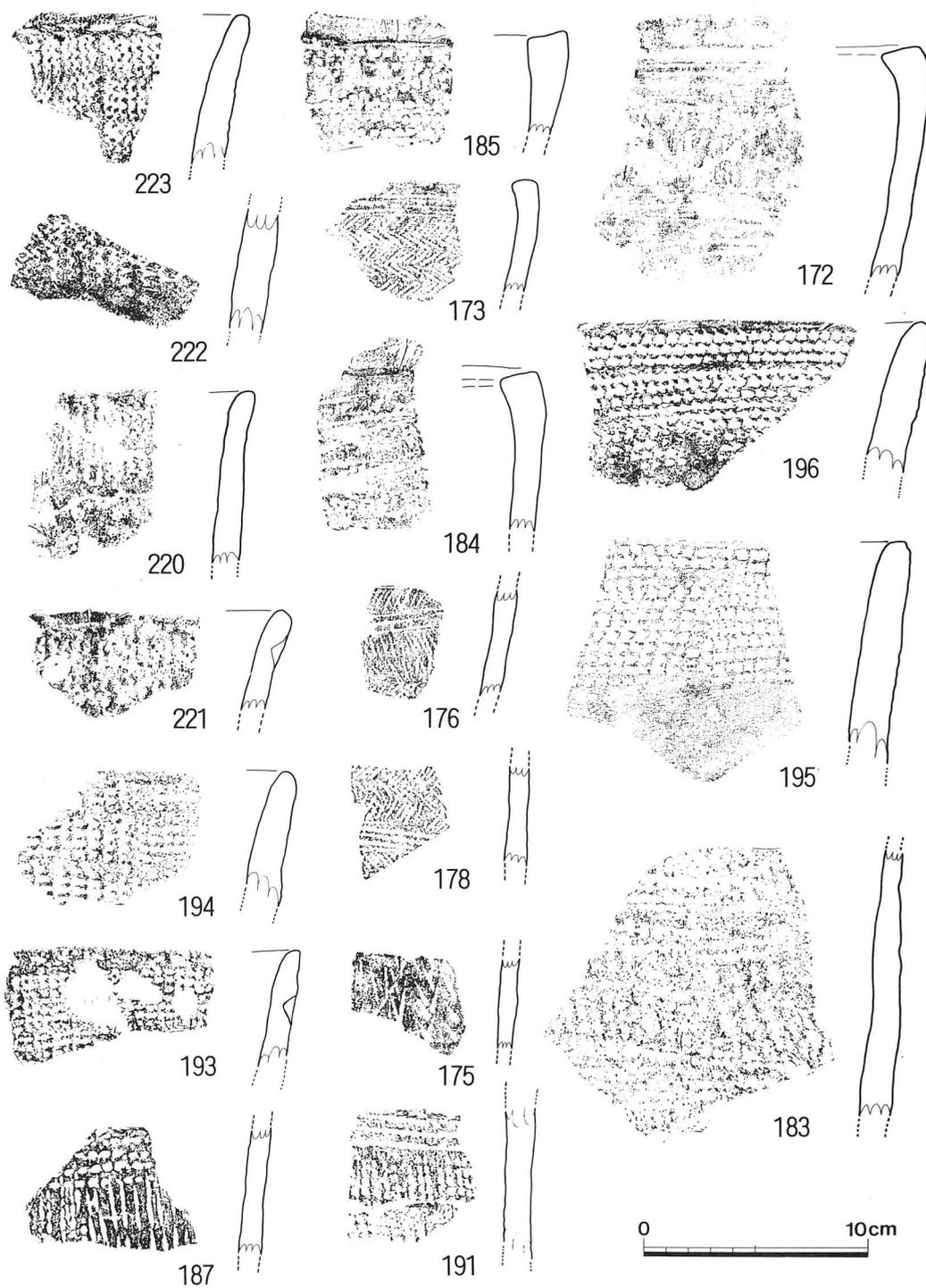


Fig 126 V区出土遺物⑩貝殼文凹筒土器 (1/3)

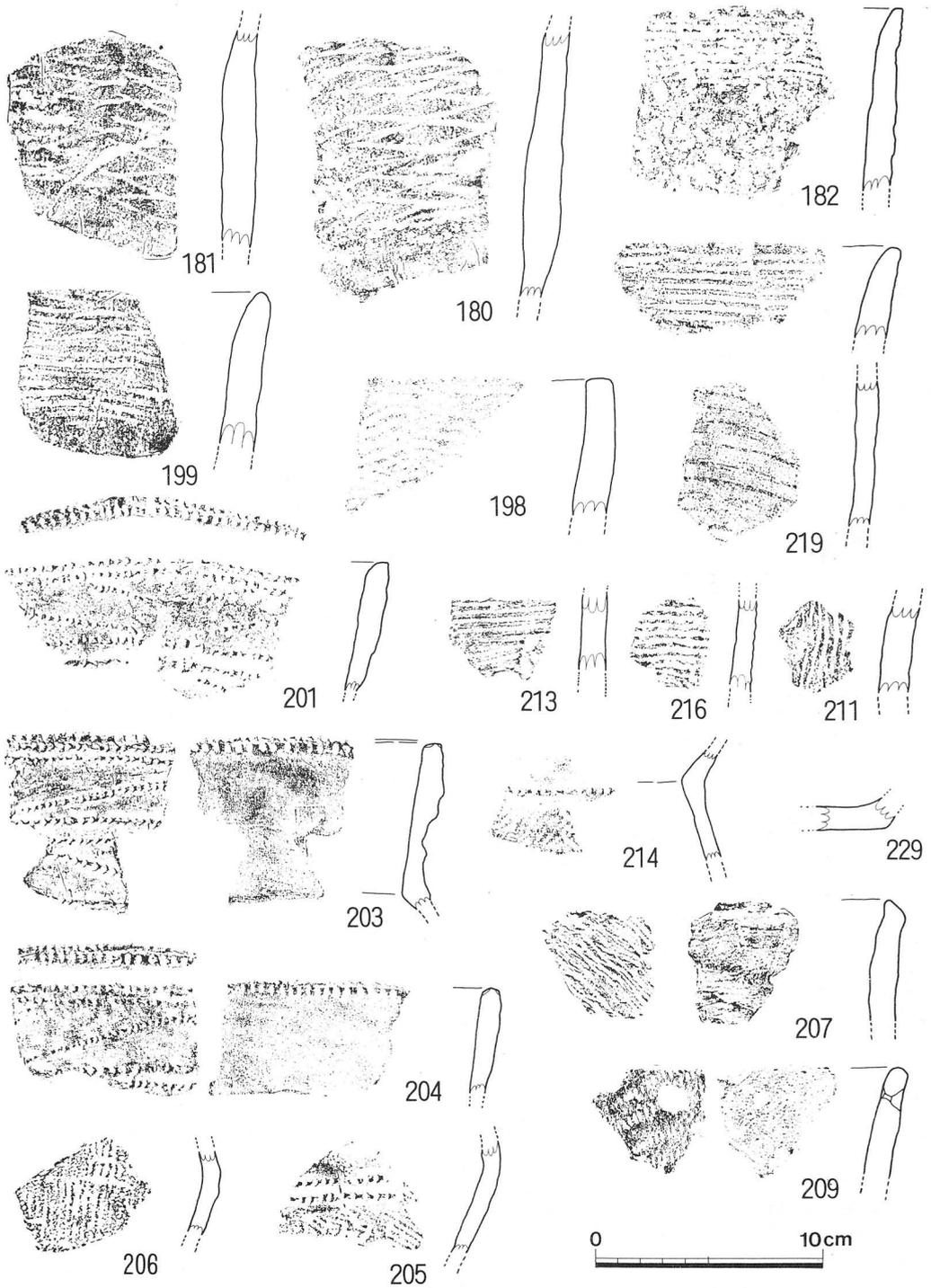


Fig 127 V区出土遺物①貝殻文・撚糸文・平杵系土器等 (1/3)

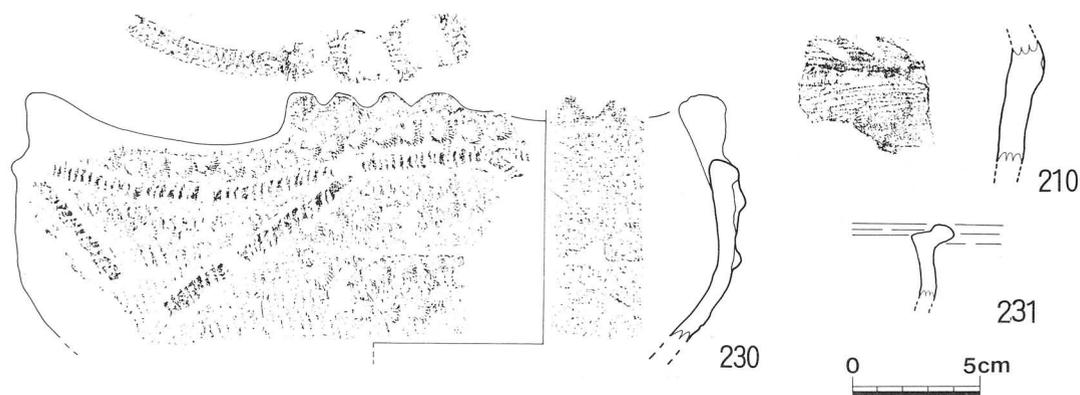


Fig 128 V区出土遺物①① その他の縄文土器 (1/3)

撚糸文土器 (PL61、Fig 127、207・208・211・212、215～210)

外器面に施文が施され、内器面はナデ仕上げである。207 は口唇部を内側につまみ出し、口唇端部に斜方向に撚糸による施文がみられる。

平杵系土器 (PL61、Fig 127、201～206・217～218)

口縁部が波状を成し、胴部はややふくらみ縄文を施す。頸部から口縁にかけて数条のゆるい線状の隆起部をもち、その上に刺突連点文を施す。隆起部間是指ナデで平滑に仕上げている。口唇端部にも刺突連点文を施す。

その他の土器 (PL61、Fig 127～128)

209は、口縁部が外上方に直行ぎみに開く土器で表面は胴部から口唇端部へ斜方向に刺突文を施す。工具は細いヘラ状のものを利用している。また口縁直下に外→内へ穿孔されている。

210は3号住居内より出土した。外面は貝殻条痕のあときれいにナデ調整が施される。ゆるやかにふくらむ突帯がつき、斜方向にヘラ状工具による押圧文が施される。長友良典氏（宮崎県埋蔵文化財センター）より後期所産ではないかとの意見があった。笠下よりこの他に出土似がない為、速断できない。一応型式不明の土器（縄文後期？）としておく。外器面にススが付着する。

230は船元式土器の範疇で握把されるものである。口縁端部に鶏頭状の飾りがつき、それぞれの端部には細い沈線が併行して走る。口縁下には貝背端部を直行して横方向に押圧して文様をつける。口縁下部から斜方向、あるいは横方向にアーチ状の突帯がめぐり、突帯には連線して刻目が施される。また、その空間に貝背端部の押圧文が連線して横方向に数段施文される。焼成、胎土ともに良好で内側はていねいにナデ調整が施され平滑である。炭が表面に付着する。

231は浅鉢形土器の口縁部である。内側に希薄な沈線を施す。頸部断面形は「く」の字を呈し、内側の稜は明瞭である。外面にススが付着する。

C. 弥生・古墳時代

1号住居跡 (Fig 129)

V-11区で検出した。5.4m×5.6mのほぼ方形の住居跡である。床面は検出面より25~35cmを計り、ほぼ平坦である。炭化物の集中する土坑が南側の柱間に掘られている。長軸70cm、短軸50cm、深さ15cmを計る。また、東側柱間より浅い土坑が掘られているが、遺物等はない。長軸80cm、短軸60cm、深さ13cmを計る。主柱穴は4本でやや南よりに掘られる。深さは10~25cmと浅い。出土遺物は少なく、敲石、礫器、鉢・甕・壺片が出土している。(Fig 130)

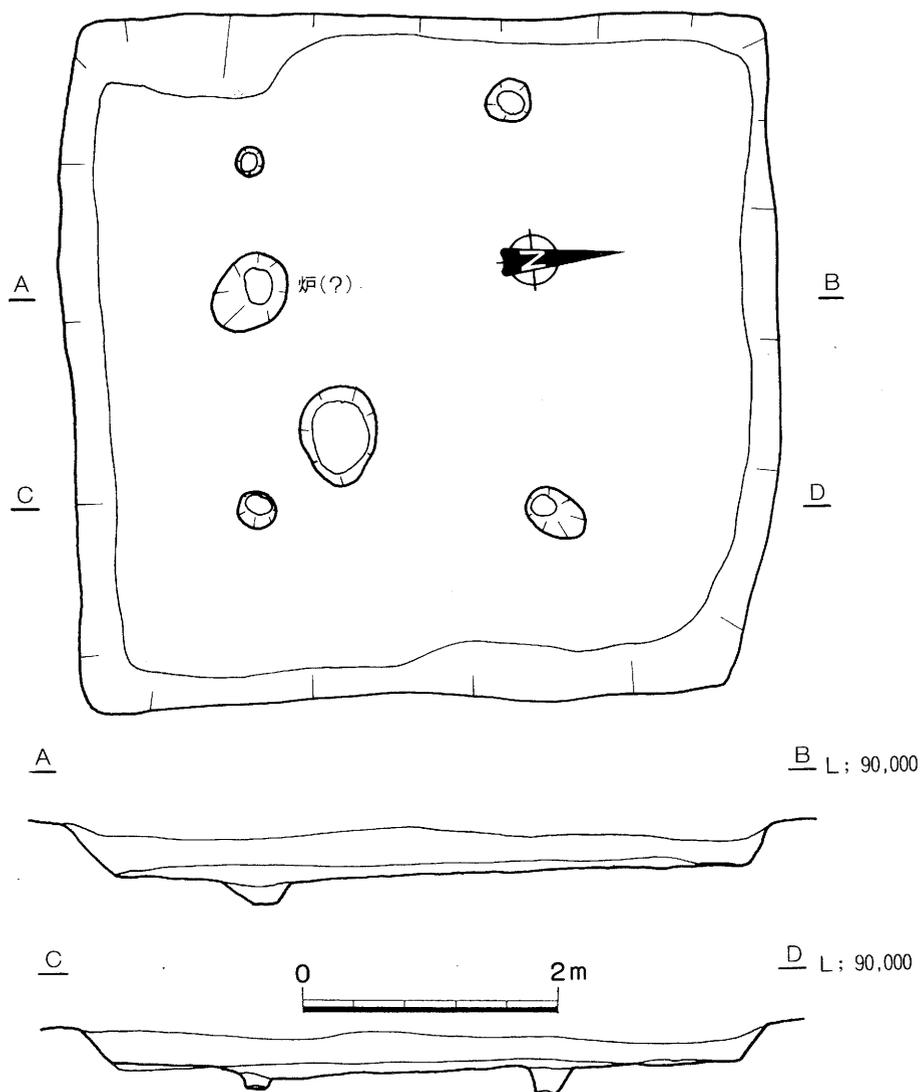


Fig 129 V区1号住居跡実測図 (1 / 60)

1-05は壺頸部片である。やや外上方に短く開き、口唇部は内傾するものと思われる。内外面ともに横方向のナデ調整が施される。1-07は口縁が外反する甕口縁部で、調整は外面が縦方向、内面が横方向のナデを行なう。1-08は鉢である。胴部は球状に膨らみ、口縁部は短く立ちあがる。内側に綾がつく。調整外側にハケを行なった後一部ナデ仕上げである。内面は剥落がひどく調整は不明。外面にススが附着する。1-11は砂岩製の敲石である。両端を使用し、上面に一部剥離痕が見られる。1-09と1-10はともに南西隅より出土した。片面が自然面の薄い剥片の周囲を荒く加工した礫器で、一部使用痕が認められる。砂岩製。(住居跡建設の際出土したものをそのまま保存したものと思われる)

2号住居跡 (Fig 131・132)

1号住居跡の北西5m程の前に主軸を異にして位置する。主軸方向は一致しない。平面形は方形で4.6×4.8mを計る。深さは検出面から20~30cmで、床はほぼ平坦である。支柱穴は4本で深さ60~70cmを測る。中央部に焼土が集中し、南北に3つの土壇が並ぶが遺物等の出土はない。出土遺物は、鉢・ミニチュア土器1点、頁岩製砥石(2-04)・砂岩製砥石(2-05)各1点である。

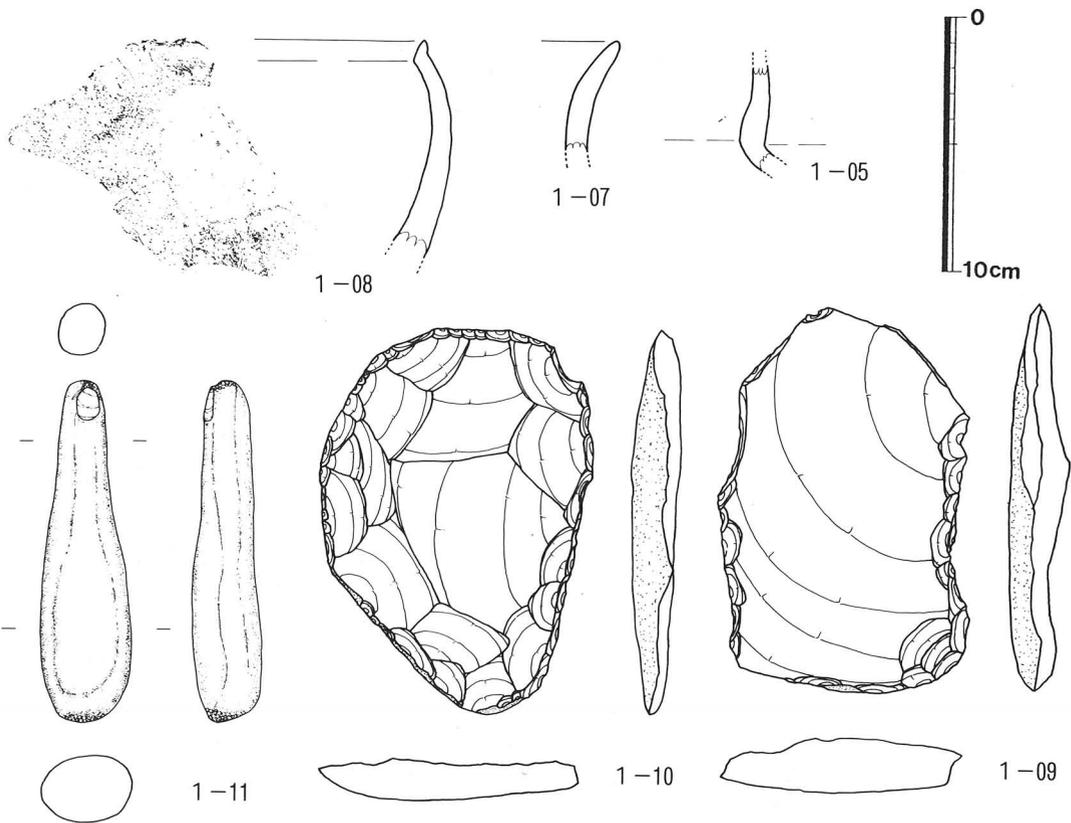


Fig 130 V区1号住居跡出土遺物(1/3)

2-01は鉢の口縁部～胴部片である。調整は荒いナデによる仕上げで、胴部下方は器壁が厚い。口縁部は指押えで成形している。外器面にススが付着している。2-02は、2-01と調整・胎土ともによく似る鉢の底部であるが、径が一致せず同一個体ではない。2-03はミニチュア土器で、底がやや尖底気味に丸くなり、口縁部は頸部で内一回くびれて外反する。稜は明瞭でなく、最大径は口唇端部となる。外器面全面に頸部から底部までススが付着する。2-04～2-05は一面を丁寧に使用する砥石で中央部がやや凹む。

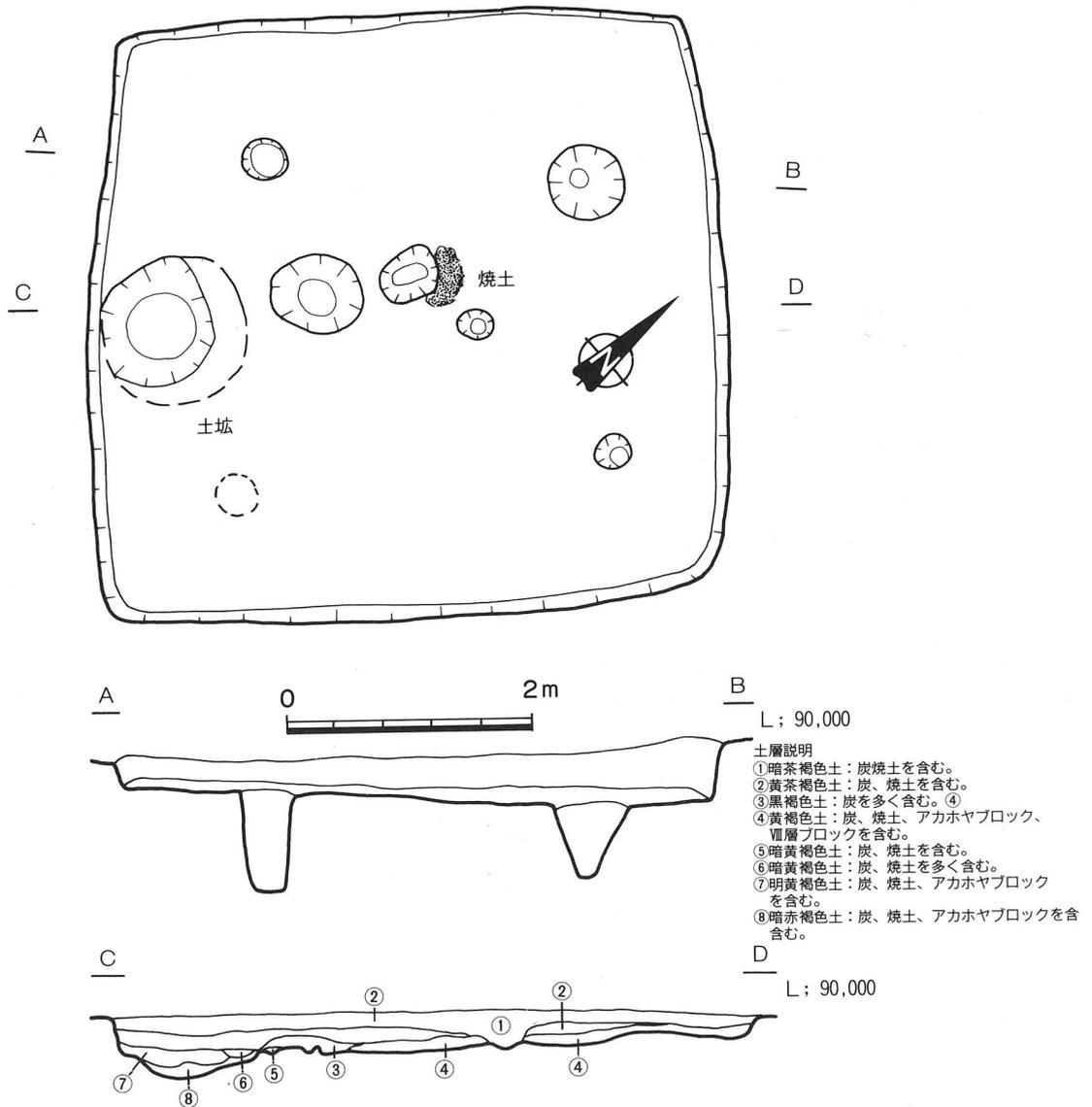


Fig 131 V区2号住居跡実測図 (1/60)

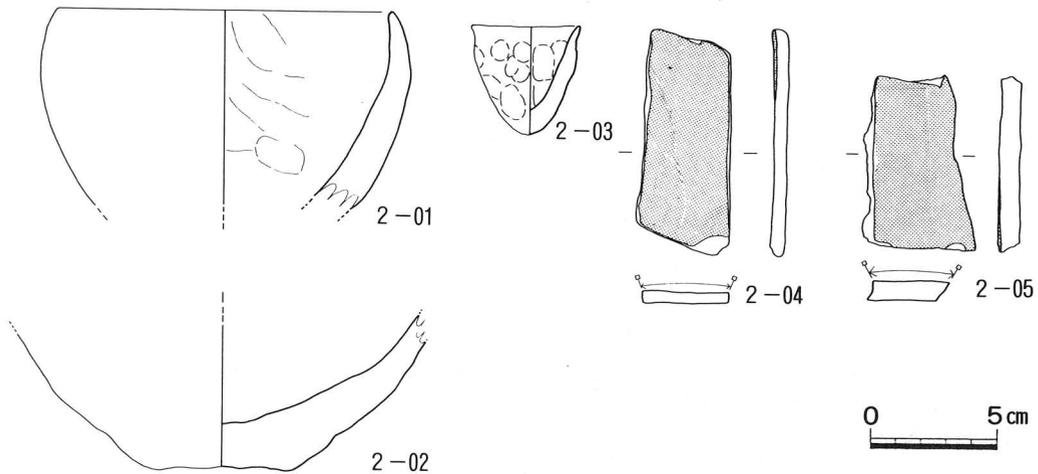
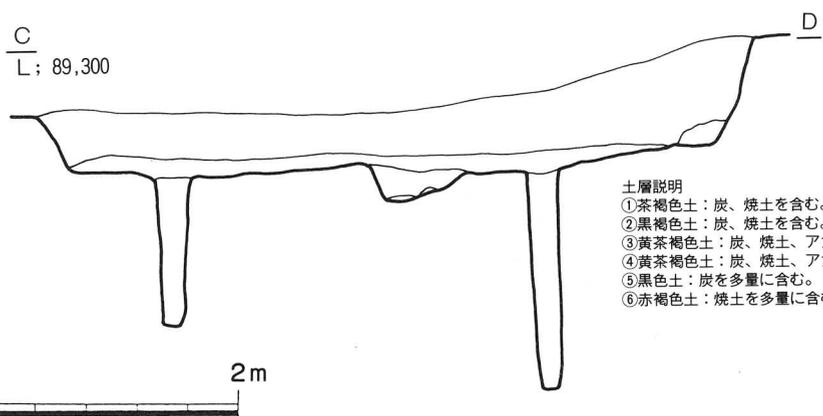
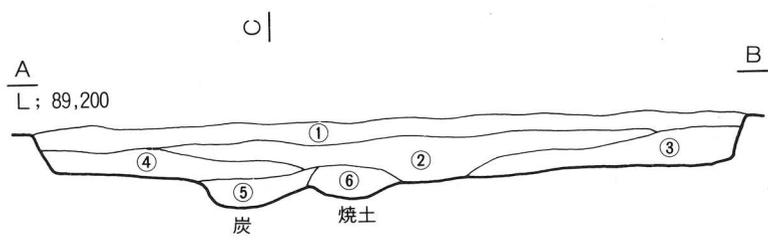
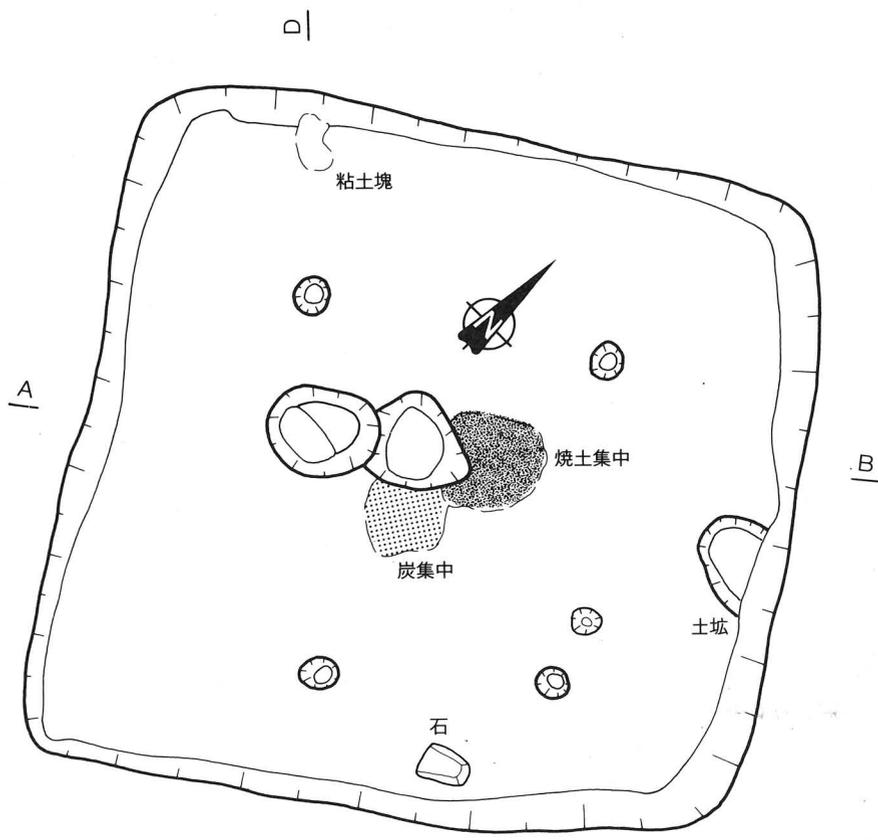


Fig 132 V区2号住居跡出土遺物(1/3)

3号住居跡 (Fig 133)

V-12区、やや北寄りで見出した。平面形は隅がやや丸くなる方形を呈し、長軸5.6m、短軸5.4mを測る。深さは検出面から35~90cmで、床面は北西から南東へやや傾斜する。主柱穴は4本でやや中央寄りに掘られる。柱穴は1m20cm~1m70cmと異常に深い。中央に2ヶ所浅い土壇があり、炭と焼土が別々につまる。炭と焼土は南東および北東方向にそれぞれうすく広がる。東壁中央に半円形の土壇があるが、遺物等はない。南壁中央に平たい礫が据えられている。西壁やや南寄りには粘土塊がある。出土遺物は他の住居跡と比べて豊富で、甕・壺・砥石などが出土している。(Fig 134・135)

3-01~3-08・3-10~3-13は甕口縁である。3-01・3-08は口縁が直行し、その他はやや上方へそりぎみに立ち上がるタイプである。3-03は外器面にタタキが施されている。3-04はタタキのあと、さらに一部を残し荒いナデを施す。頸部下に指押え痕がつく。3-09は、壺頸部と思われる。3-14は頁岩製の砥石で一面を利用している。3-15は砂岩製の砥石で全面を利用している。また、両端に敲打痕が残る。3-16~3-19は甕である。3-16は頸部に段がつく。表裏ともに指押え痕がのこる。3-17は外面は頸部下が縦方向、胴部は斜め下方、裏面も斜め下方にタタキを施したあと、ナデを施す。3-18・3-19は外面はタタキ、内側は3-18はハケを施す。3-19は剝落の為不明。3-20は二重口縁壺で、頸部に櫛描文が施される。3-21は壺口縁で板状痕が残る。3-22は甕底部でタタキが残る。3-22は平底の底部で稜がつく。3-24~3-26は壺底部で、稜がつき、ミガキが施される。



- 土層説明
- ①茶褐色土：炭、焼土を含む。
 - ②黒褐色土：炭、焼土を含む。
 - ③黄茶褐色土：炭、焼土、アカホヤブロックを含む。
 - ④黄茶褐色土：炭、焼土、アカホヤブロックを含む。
 - ⑤黒色土：炭を多量に含む。
 - ⑥赤褐色土：焼土を多量に含む。

Fig 133 V区3号住居跡実測図 (1 / 60)

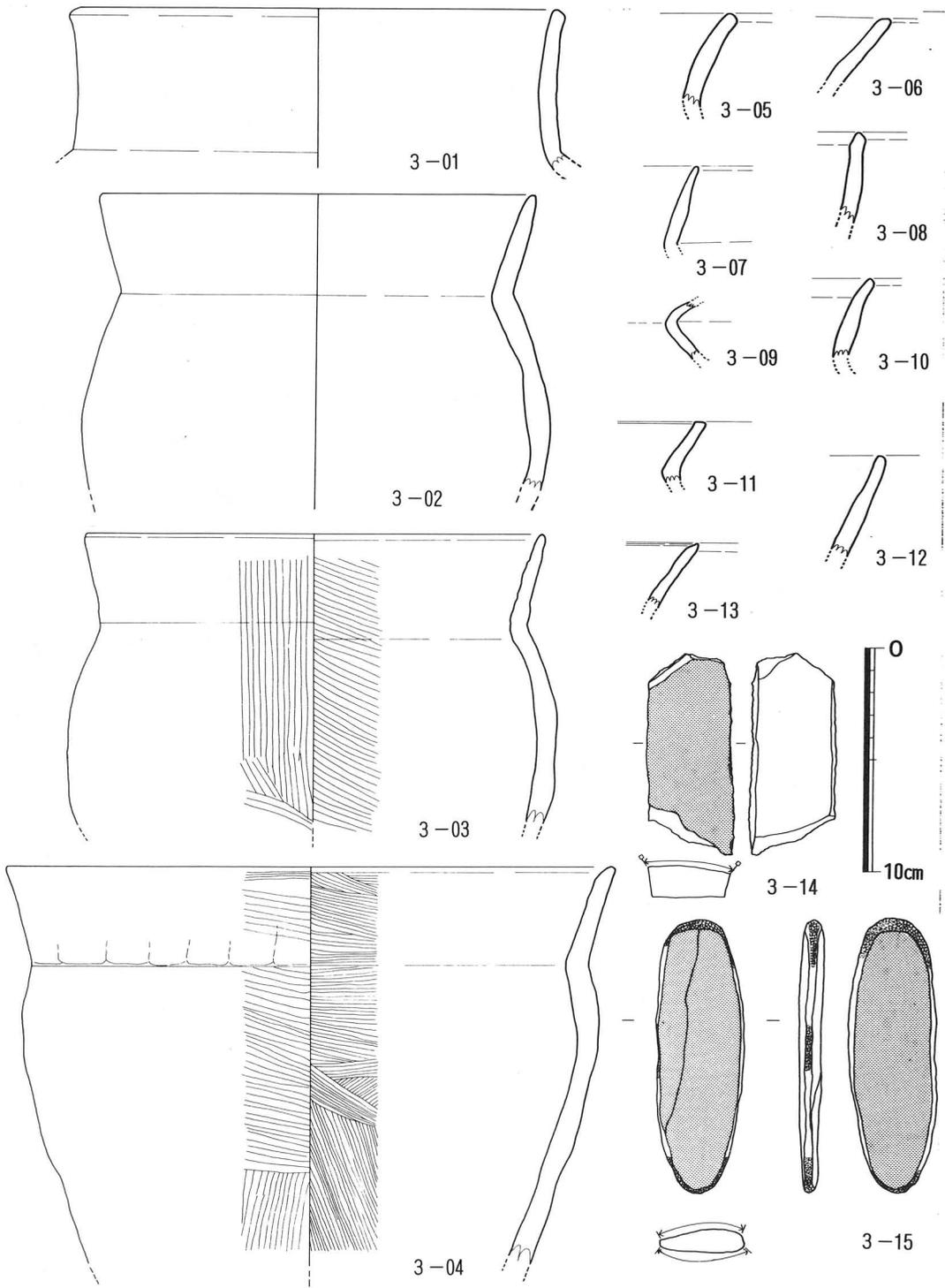


Fig 134 V区3号住居跡出土遺物① (1 / 3)

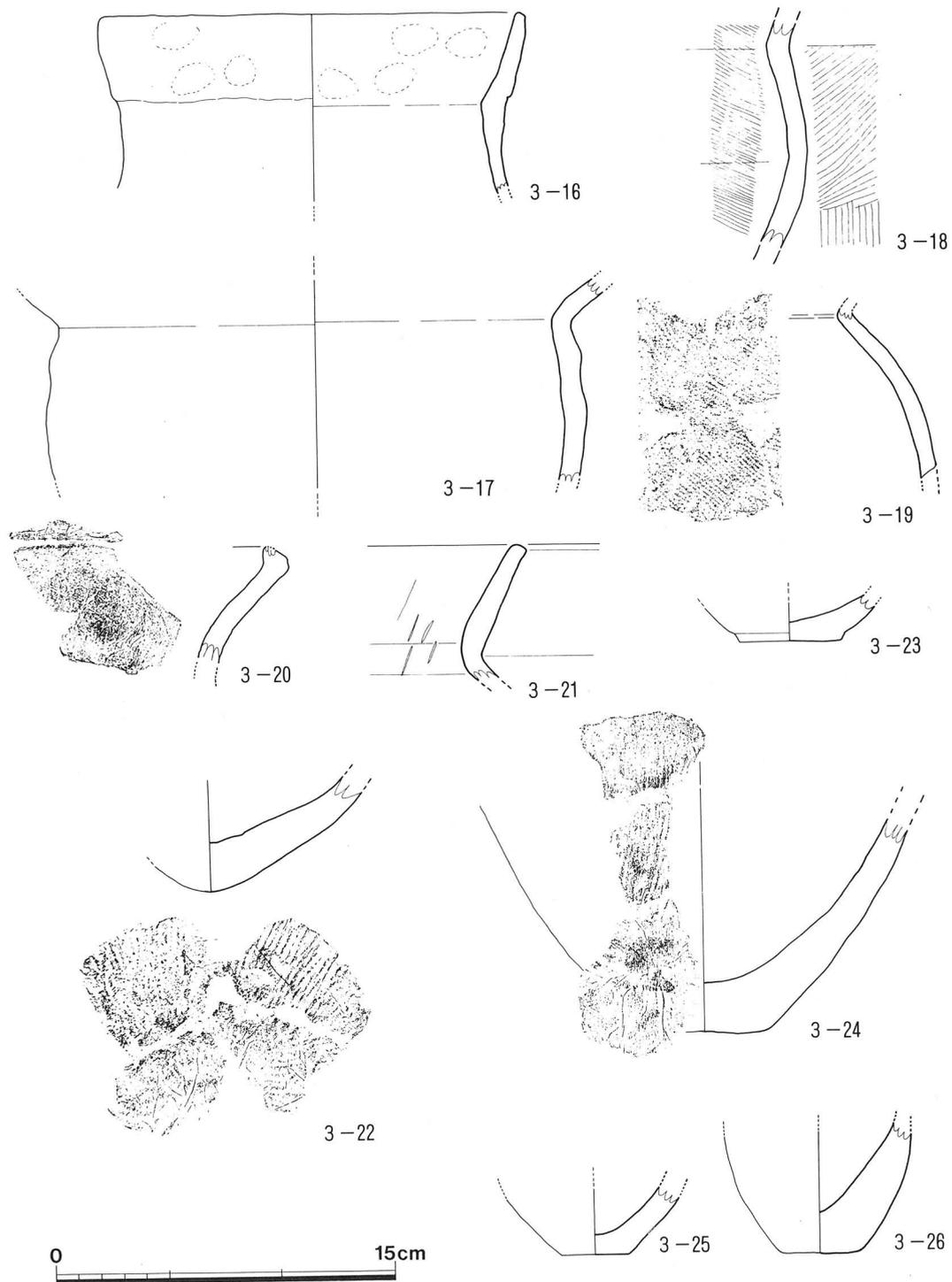


Fig 135 V区3号住居跡・出土遺物②(1/3)

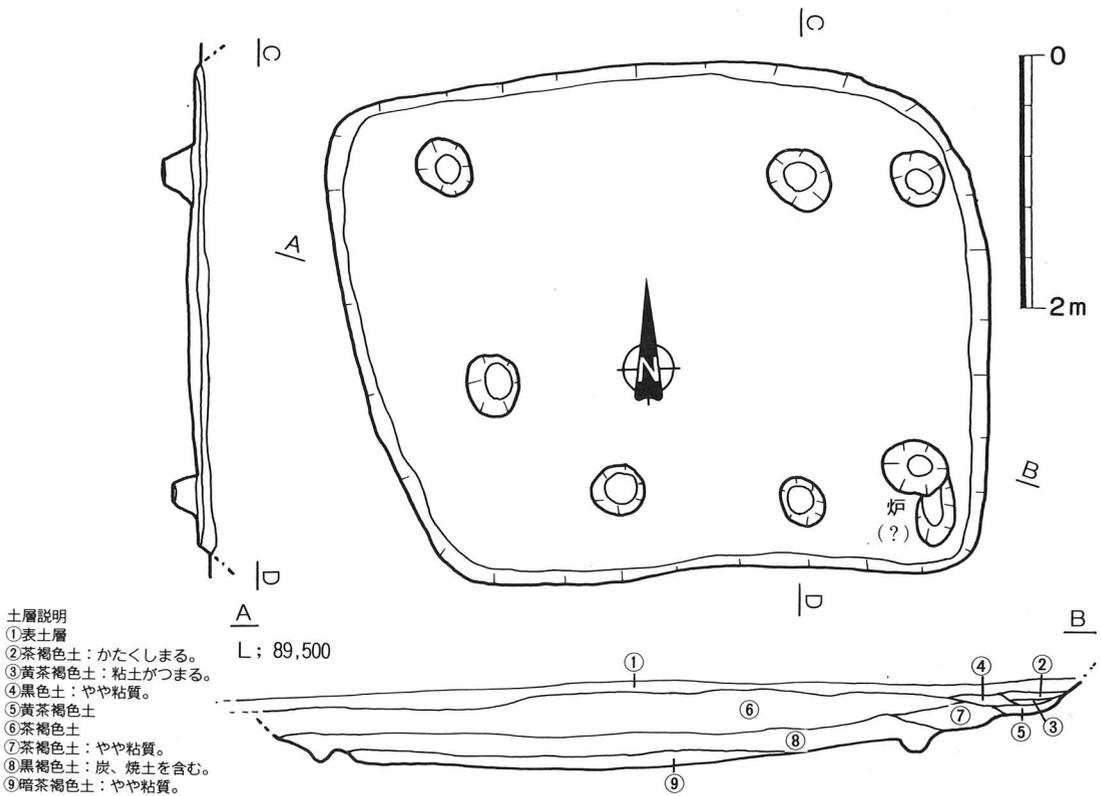


Fig 136 V区4号住居跡実測図 (1 / 60)

4号住居跡 (Fig 136)

V-5とV-7区にまたがって検出された。平面形はやや不成形な四角形を呈する。長軸 5.2m、短軸 4.1m、深さ 0.2mを計る。床面は中央がやや凹み、東から西へゆるやかに傾斜する。東南隅に焼土及び炭が集中する浅い土壇があり、これが炉と思われる。主柱穴は不明で、柱穴が不規則に掘り込まれる。出土遺物はない。

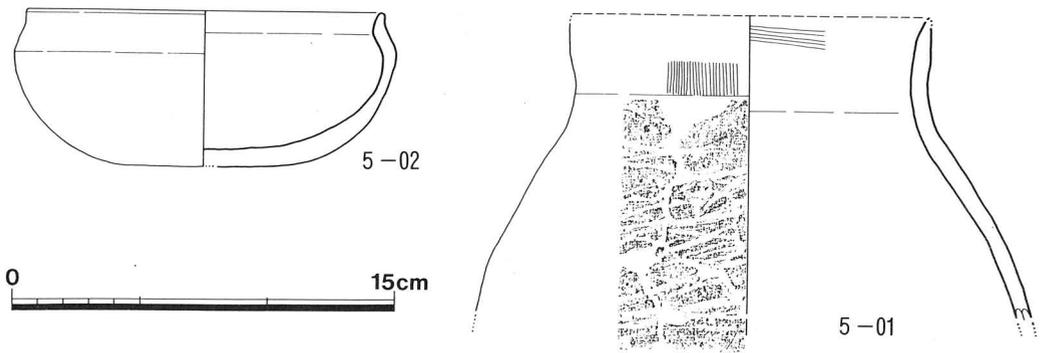


Fig 137 V区5号住居跡出土遺物 (1/3)

5号住居跡 (Fig 137・138)

V-4区とV-3区の一部にまたがって検出した。北側が狭くなる方形を呈し、1辺の長さは3.4m~3.5mである。深さは26cmを計る。床面はほぼ平坦である。支柱穴は4本と思われる。南側のピットの横にやや浅い土壇がつく。中に若干の炭と焼土を含む。まわりが焼けている。東中央のピットは新しい。西側中央壁寄りに細長い土壇があり、付近より土器(5-01、5-02)が出土した。

5-02は椀形土器で、胴部は球状に膨らみ頸部付近で鈍い綾を形成して内傾し、口唇端部はまっすぐ立ち上がる。口唇部内側には不明瞭な綾がつく。胎土焼成ともに良好でヘラナデにより内外面ともに丁寧に仕上げられている。5-01は直口壺と思われる。口縁端部は欠損、頸部外面は縦方向、内面は横方向のナデ調整を施す。外面頸部より胴部に胴部にかけて、タタキを施した後、荒いヘラ磨きが施されている。

その他の出土遺物 (Fig 139)

233は壺底部である。弥生中後期後葉に比定される。

232は複合口縁壺である。頸部に波状櫛描文が施される。弥生時代後期後葉に比定される。

234と235はミニチュア土器である。234は2-03と同時期、同タイプのもと思われる。235は口縁部が内傾し、砲弾型を呈するミニチュア土器である。

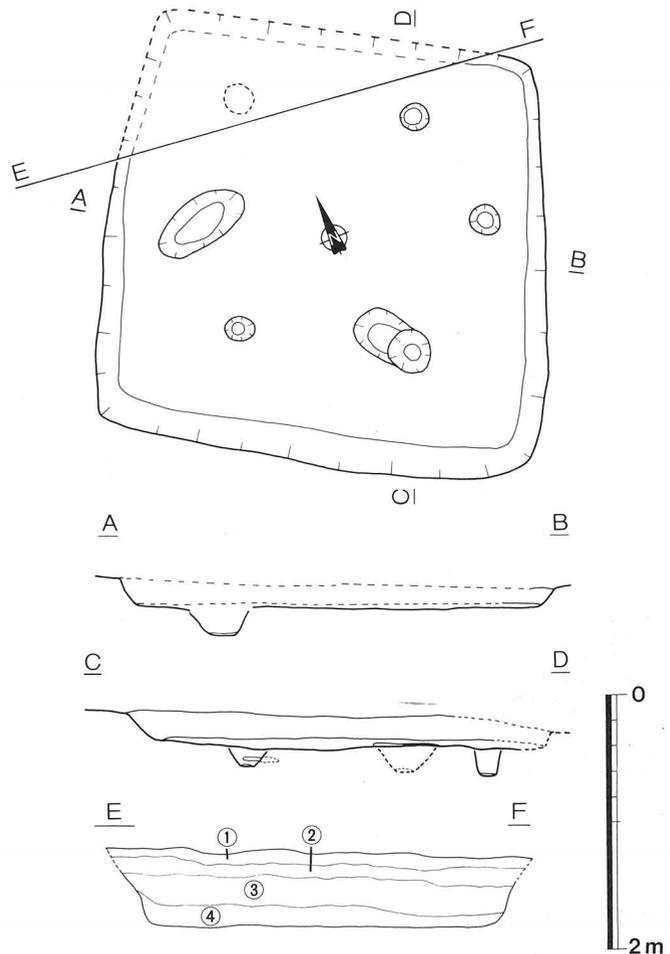


Fig 138 V区5号住居跡実測図 (1/60)

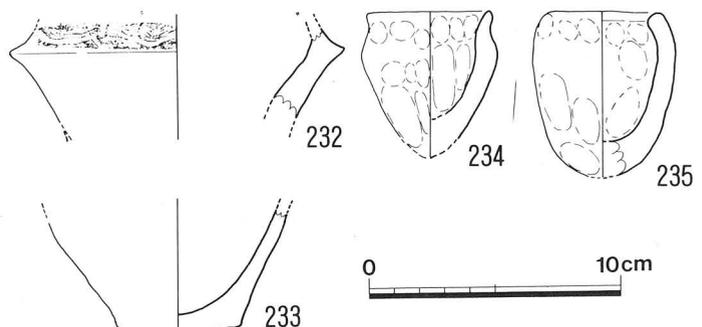


Fig 139 V区出土その他の土器 (1/3)

d. 中・近世

V区では、中・近世の遺構として、祭祀遺構及び組石遺構を各1基、土壇を7基、掘立柱建物を8軒、溝状遺構を1基検出した。遺物として、明銭・陶磁器・土師皿等がある。主に祭祀遺構、組石遺構内からの出土で、他の遺構より遺物は出土していないが、量・質ともにIV区に劣る。また溝が中央部に一条しか走らず、代わりに建物群が集中する点、祭祀遺構が他の遺構と離れている点がIV区と違う。

祭祀遺構 (Fig140・141)

V区の北端で組石遺構に近接する形で検出された。径2~3cmの小砂利を1.2m四方に厚さ15cm程敷きつめている。上場1.35×1.45m、下場0.5×5.5m、深さ0.25mの土壇をもつ。東側より方柱状の石が斜めに入り、中央部に楕円形の凝灰岩礫が据えられている。小砂利はこれから上に敷かれている。出土遺物は土師皿2点(239・240)と陶製の皿(237)が出土している。237は唐津焼の四方皿で四方に鉄釉で絵がかかっている。重ね積み痕が3ヶ所に見られる。年代は1580~1610年頃である。

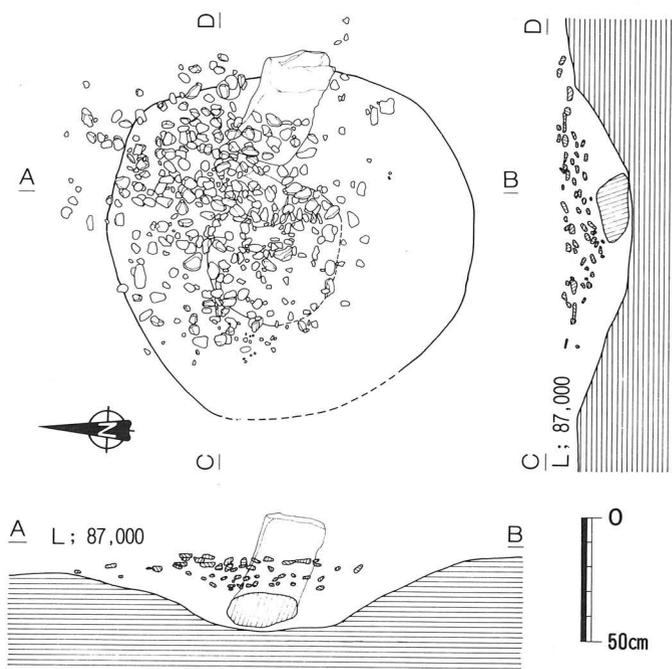


Fig 140 V区祭祀遺構実測図 (1/30)

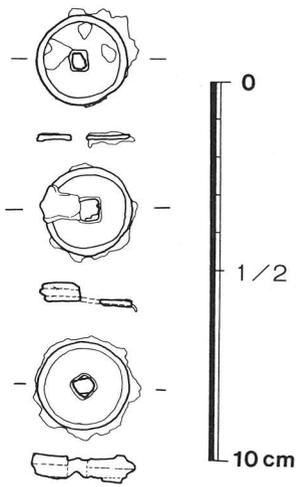
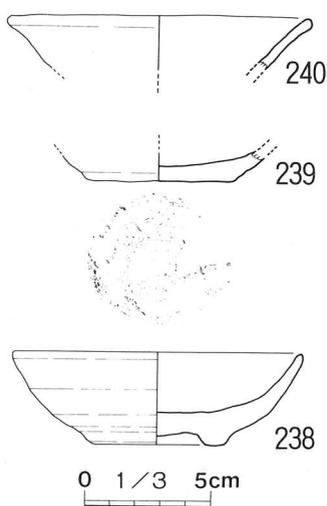
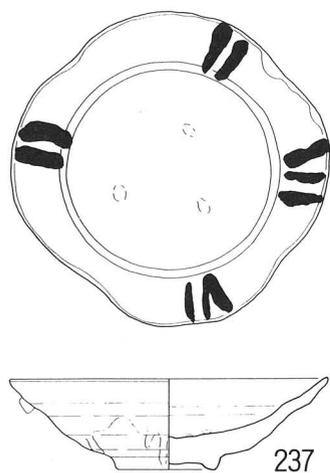


Fig141 V区祭祀遺構・組石遺構出土遺物 (1/2・1/3)

239 は口径12cmを計る土師皿で底部は欠損しているが、おそらく回転糸切り底になるものと思われる。240 は土師皿の底部で回転糸切り底である。底径は 5.8cmを計る。

組石遺構 (Fig 141・142)

分布調査に確認されて、組石遺構と仮称されたものである。今回はこの名称をそのまま踏襲する。組石遺構は方柱状の石を円形に斜上方に開くようにして並べたもので、北と南の一部が切れる。長軸 3.5m、短軸 3 m、深さ 0.3mの円形の土壇を持つ。土壇には3ヶ所、南西側に片寄って10~20cm程の浅いピットが掘り込まれる。遺物は組石内より古銭と陶製の皿が出土し、土壇内より何も出土しなかった。特に古銭は北側組石の下部に集中する。種類は明銭（洪武通宝がほとんどで判読不明のものも少なくない）と鉄銭（2~3枚重なる。Fig 147）および寛永通宝である。その他北西側の石の下に祭祀遺構内より出土した四方皿と同時代の木灰釉の唐津焼皿が出土している。このことにより祭祀遺構と組石遺構はそう時期をおかずに営まれたものと思われる。

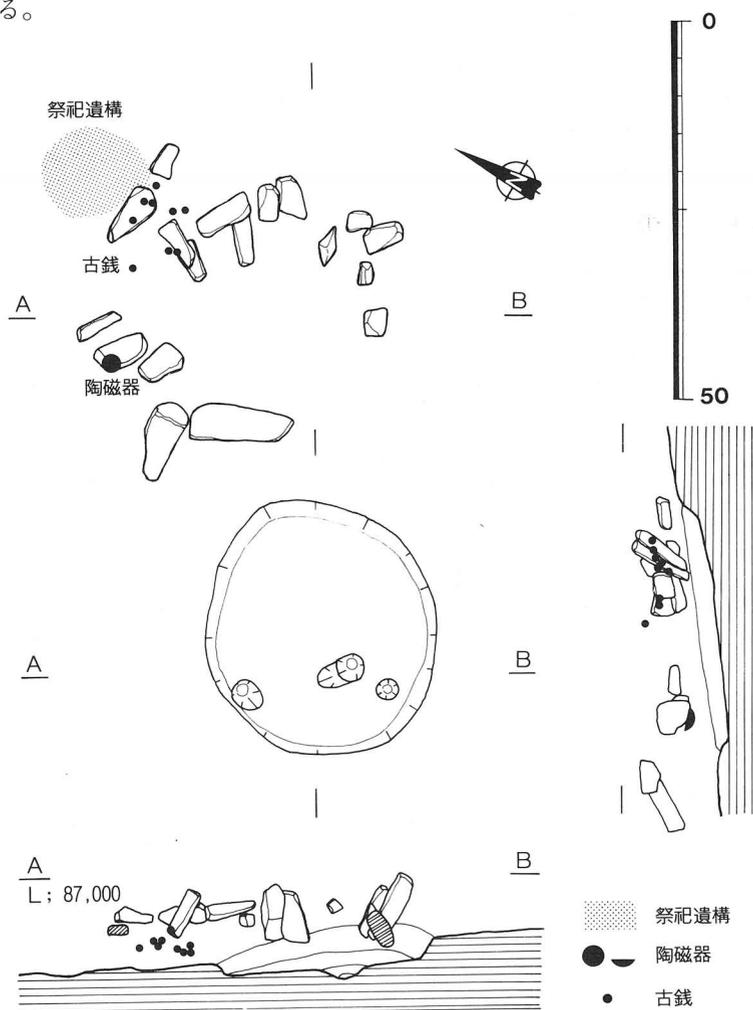


Fig142 V区組石遺構実測図 (1/100)

土坑 (Fig 143・144)

V区で検出した土坑は8基のみで、出土遺物はない。多数の土坑が出土したIV区とは明らかに異なる傾向を示す。その内分は、平面形が楕円形を呈すものが1基（1号土坑）、平面形が長方形を呈し深いもの3基（2・3・5号土坑）および幅の広い長方形で、浅く溝を持ち多量の炭と焼土がつまるもの3基（4・6・7号土坑）である。1号土坑は北側に段がつく。主軸方向は2号土坑と一緒にIV層上面（アカホヤ層）より掘り込まれている。出土遺物はない。2・3・5号土坑は深さが0.8~1mを測り、基底はⅧ層である。いずれも出土遺物はない。4・6・7号土坑は溝が全周しないで必ず一方が切れるもので、4号土坑は四隅にピットを持つ。6号土坑は東側2ヶ所に小さいピットを持つが、西側は後から掘り込まれた

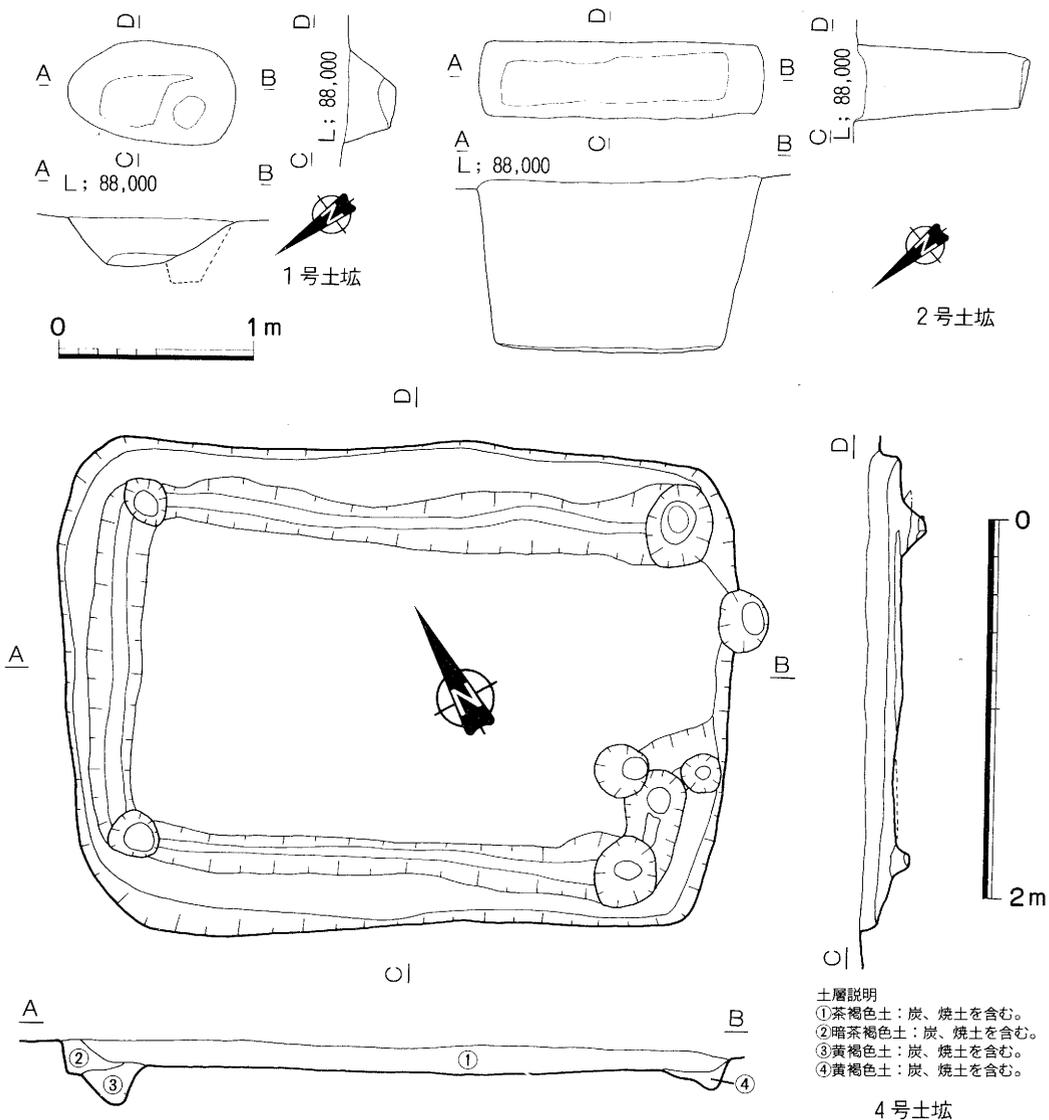


Fig 143 V区土坑実測図① (1 / 40)

ピットがあるのみである。7号土壇は南側が膨らみ、溝の起点と終点にやや大きめのピットが掘り込まれる。いずれも出土遺物はないが、炭・焼土が入る。7号には特に著しい。

溝状遺構 (Fig 113 参照)

V-7 中央部東から西へ向かって走る溝を1条検出した。検出面からの深さは10cm前後と浅い。出土遺物はなく、調査区西端手前で消える。おそらく台地端までは続かないものと思われる。5号建物の柱列を一部残して消している。

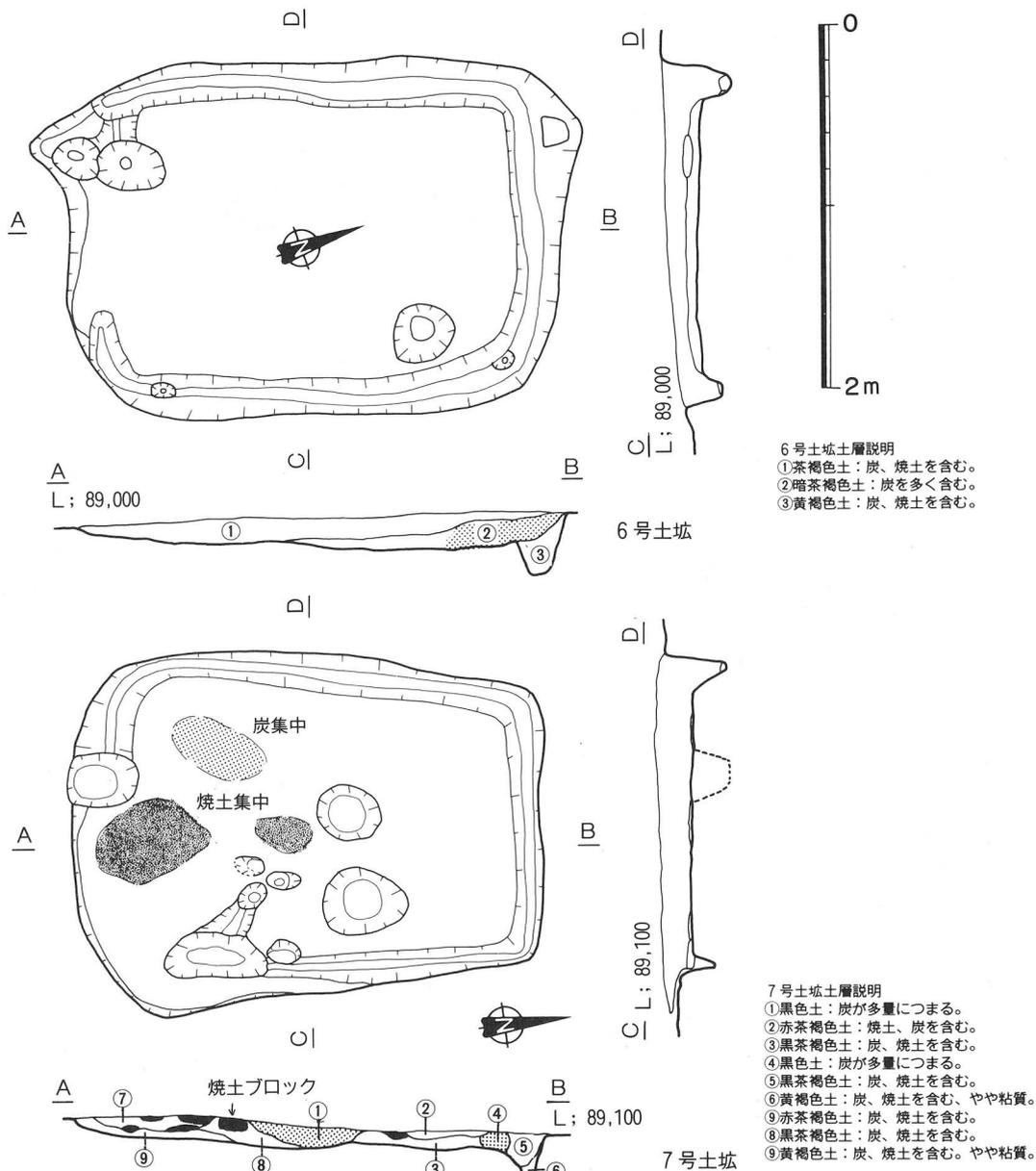


Fig 144 V区土壇実測図② (1 / 40)

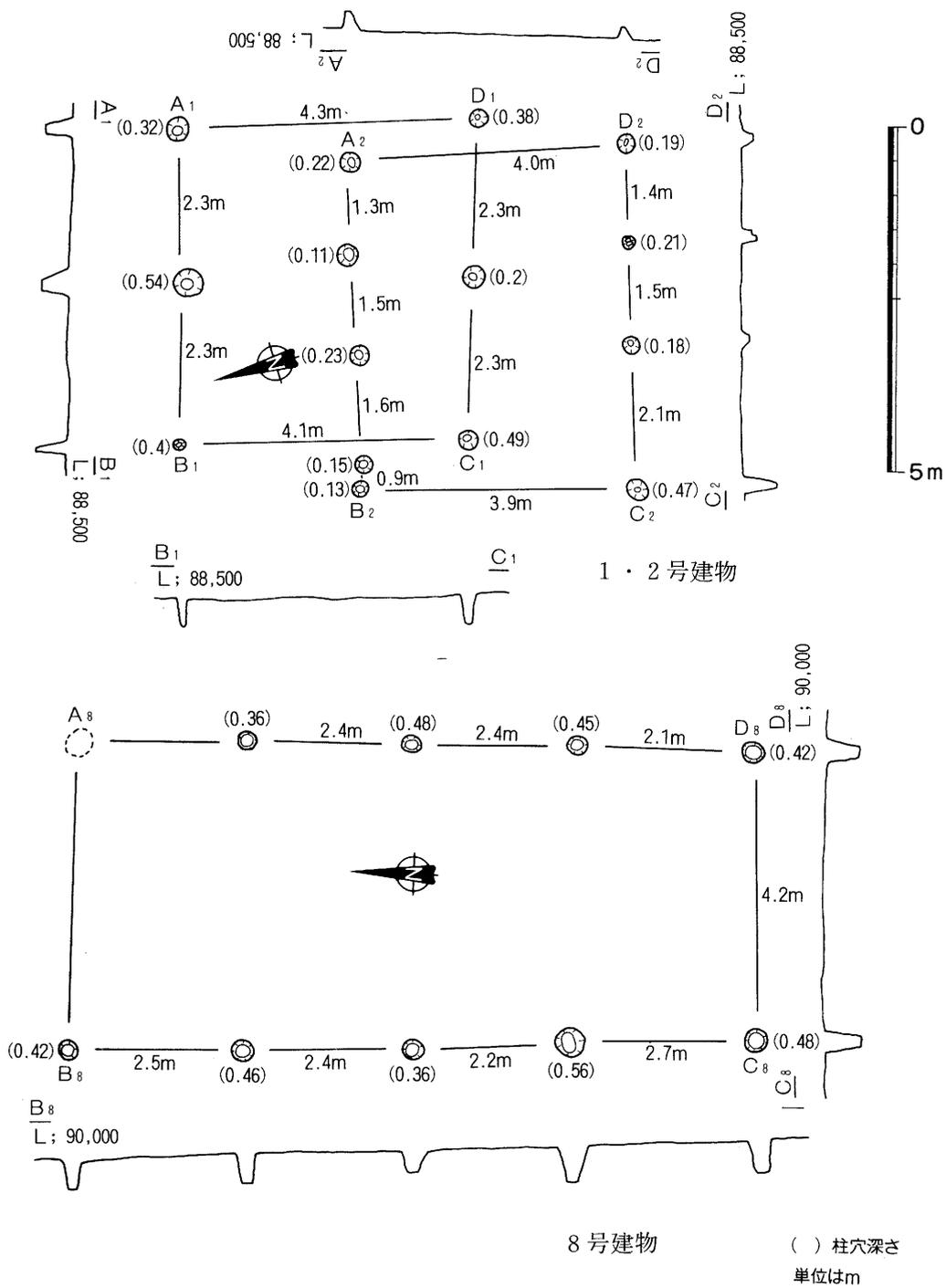


Fig 145 V区建物実測図 (1 / 100)

掘立柱建物 (Fig 145・146)

V区の掘立柱建物は、全体的にIV区よりも規模が大きい。

V区では掘立柱建物を8軒検出したが、全体的にIV区よりも規模が大きい。内分けは廂をもたないもので1間×2間が1軒(1号建物)、1間×3間が3軒(2・3・4号建物)1間×4間が1軒(8号建物)、片廂をもつもの1軒(7号建物)、両廂をもつものが2軒(5・6号建物)である。このうち1号・2号建物は主軸方向を同じにして重なり、5・6号建物は主軸方向を異にして重なる。

V区では、この他にいくつかの柱穴がV-7~9区にかけて散漫に掘られているが、復元できなかった。また、柱穴内よりの出土遺物もなかった。

その他の出土遺物 (PL63)

V区では、この時期のものでは唯一青磁器片(236)が1点出土している。236は端反りの椀で14世紀後半~15世紀中頃である。

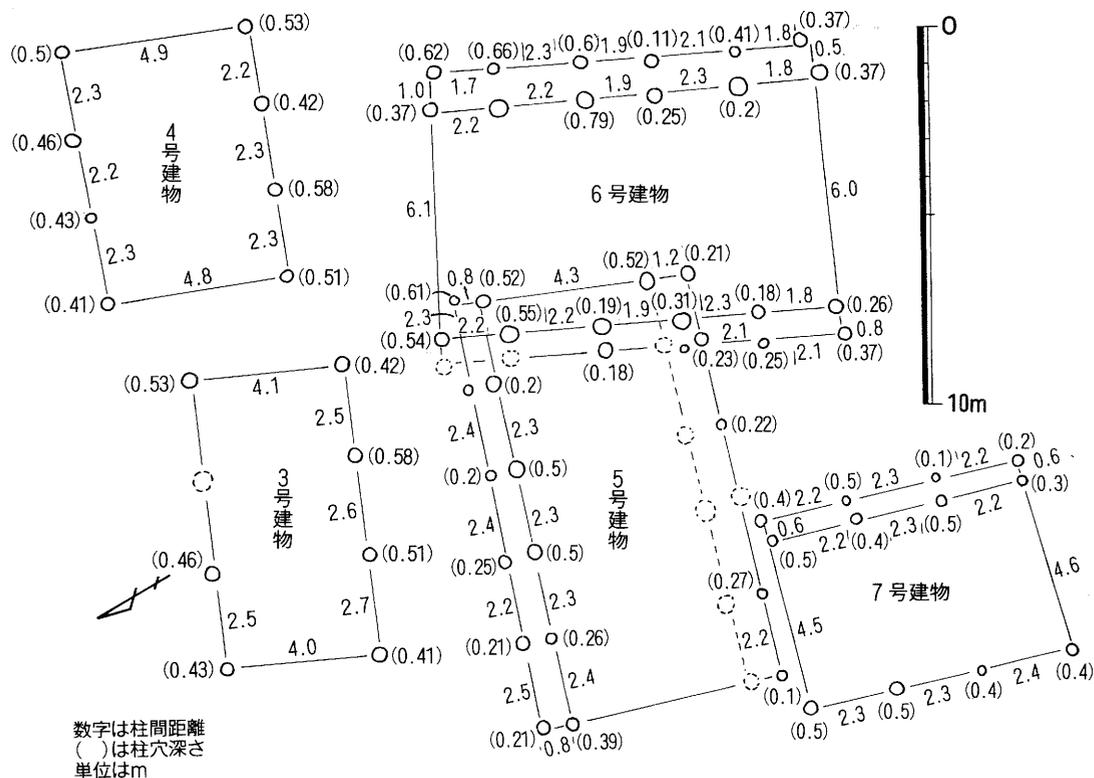


Fig 146 V区3~7号建物 (1/200)

(6) VI区の調査

1. 調査の概要

VI区は字笠下字東田に所在する。分布調査で細長く伸びる丘陵の南裾断面で剥片が採集された。試掘調査では、アカホヤ層の下に焼石が確認された。橋梁工事のため、数ヶ所のトレンチを入れてアカホヤ層の残っている平坦部を集中的に調査した。調査終了後、工事関係者が丘陵先端部の伐開中に石塔を1基発見したため、周囲を若干拡張して調査を行った。また、分布調査で剥片が採集された地点は、工事車両の出入り口となっており調査できなかった。

地鎮祭後、資材置き場となった場所の排土中より若干の遺物を採集した。(Fig 147)

調査の結果、集石遺構4基・住居跡1基(土層による確認)を検出した。(Fig 148)

出土遺物はナイフ形石器・石斧状石器・縄文土器・スクレイパー・打製石斧・敲石・磨石・石皿・礫器・土師器等である

PL 64



(1) VI区集石遺構 (分布調査時確認)



(2) 近世祭祀遺構検出状況 (南より)



(3) VI区近景 (南西より)

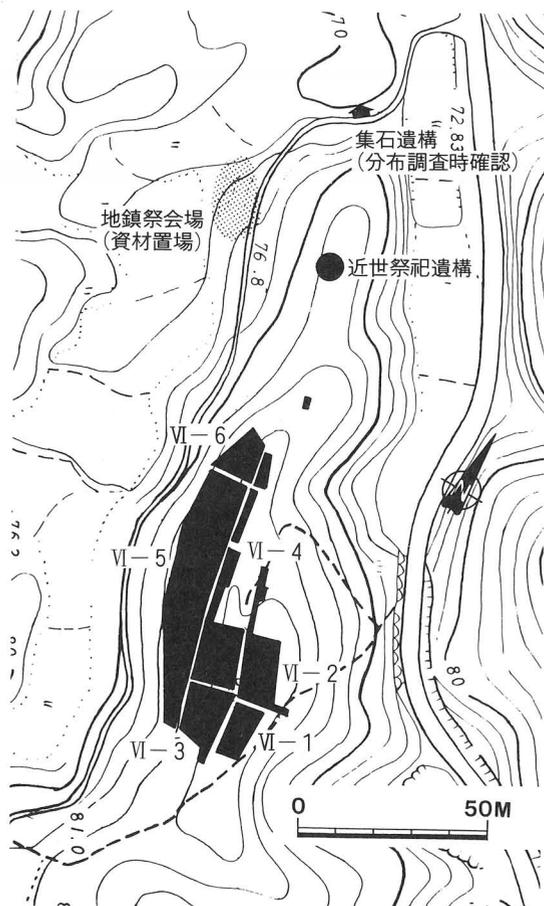


Fig 147 VI区トレンチ設定図 (1/2,000)

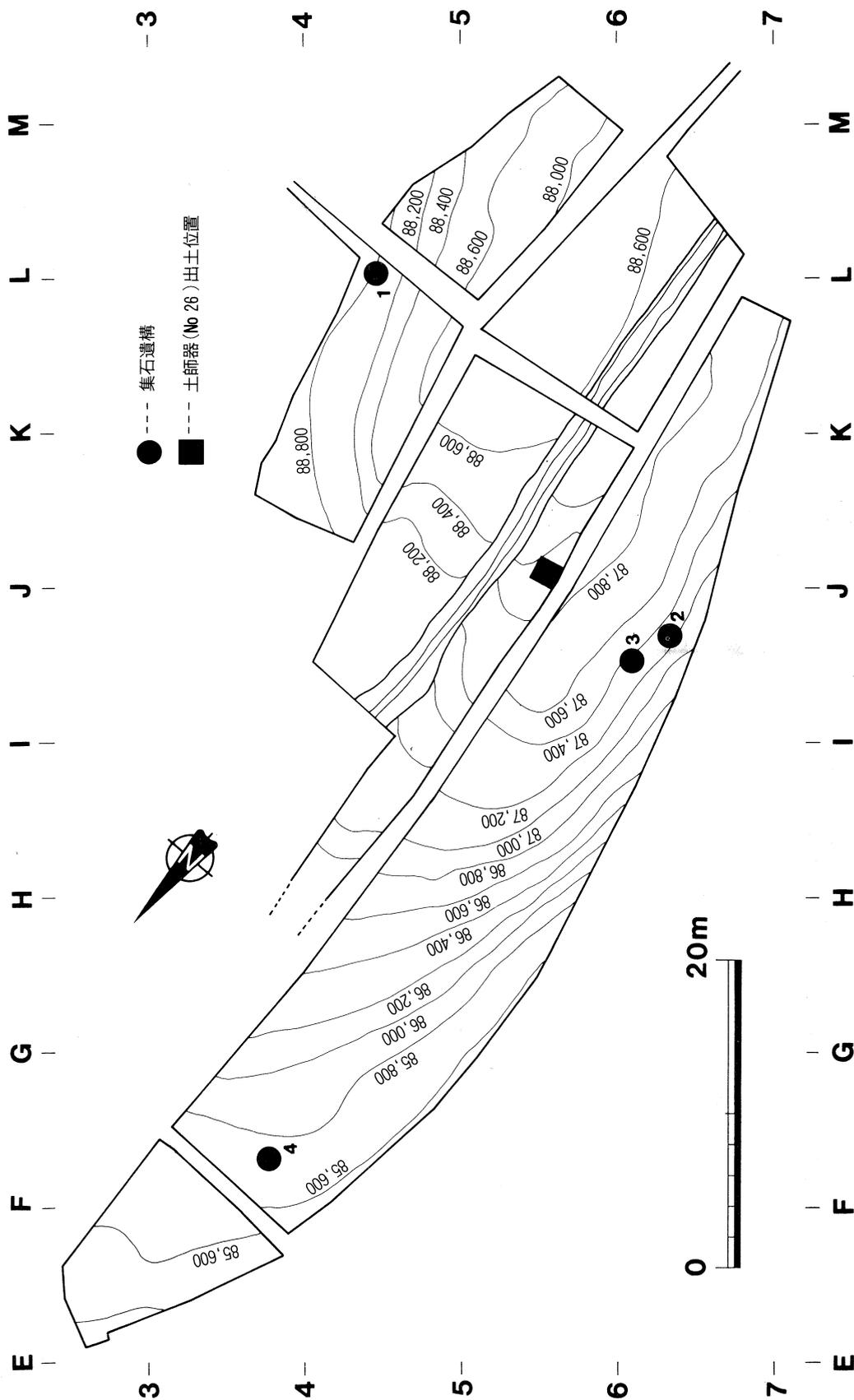


Fig 148 VI区遺構配置図 (1 / 400)

PL66



(1) VI区遠景 (東より)



(5) VI-3区検出状況 (南より)



(2) VI区遠景 (西より)



(6) VI-4区検出状況 (北より)



(3) VI-1区検出状況 (南より)



(7) VI-5区検出状況 (北より)



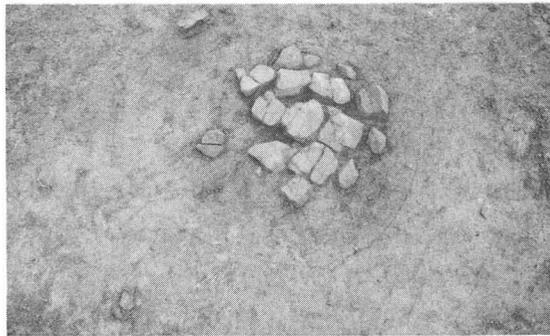
(4) VI-2区検出状況 (北より)



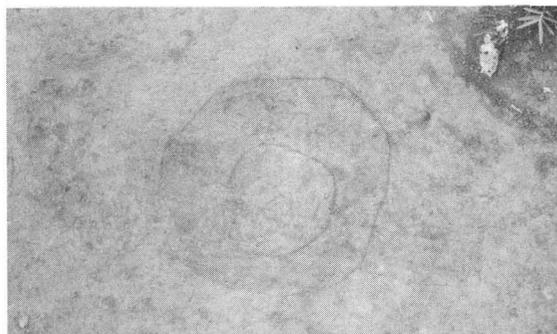
(8) VI-5区 (北端) 集中部 (西より)



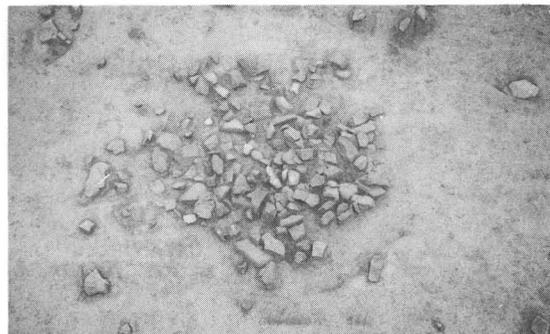
(1) VI-6区北端検出状況（西より）



(5) 3号集石遺構敷石検出状況（西より）



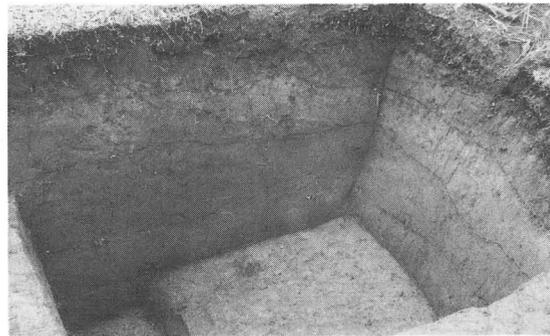
(2) 1号集石遺構完掘状況（北より）



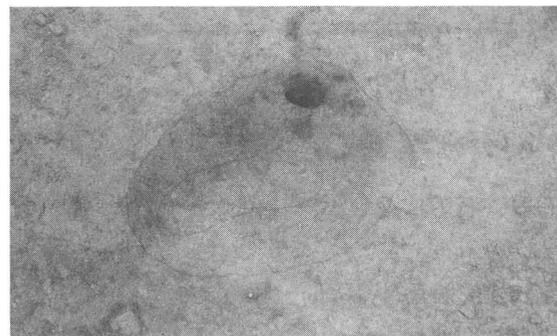
(6) 4号集石遺構検出状況（南より）



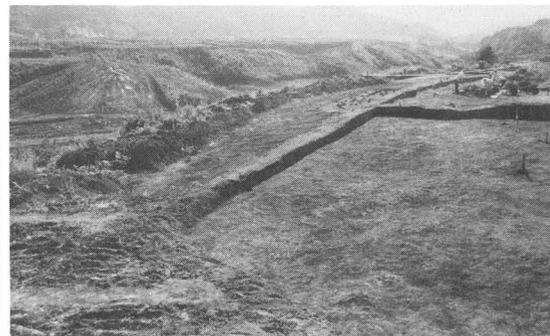
(3) 2号集石遺構検出状況（西より）



(7) 土層堆積状況



(4) 2号集石遺構完掘状況（西より）



(8) 作業風景（向こう側はV区）

2. 層 序 (Fig 149・150)

Ⅵ区の層序は、各ヶ所とも基本的に相違は認められない。

Ⅰ層 (表土層) : 黒色を呈する腐蝕土と火山灰で形成された表土層。約10cm。

Ⅱ層 : 色調は赤みのある茶褐色を呈する。10~20cm。

Ⅲa 層 : 明褐色土層 (アカホヤ層)。10~20cm。

Ⅲb 層 : 明茶褐色土層。10~20cm。やや粘性を持つ。Ⅲa 層→Ⅳ層の漸移層。場所によっては堆積が認められない。

Ⅳ層 : 暗茶褐色土層。約20cm。縄文時代早期の遺物・焼け石などが出土している。

Ⅴ層 : 暗褐色土層。約20cm。旧石器時代の包含層と思われるが、文化層として把握できなかった。粘質を帯びる。

Ⅵ層 : 砂礫混じりの粘質の黄茶褐色土。20~40cm。

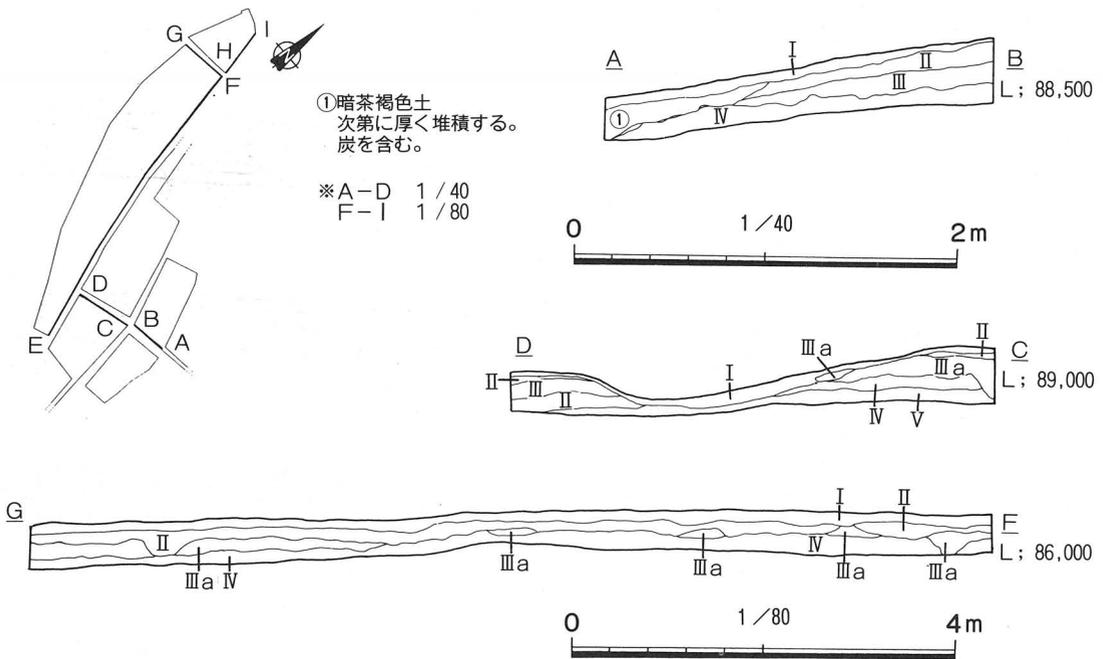


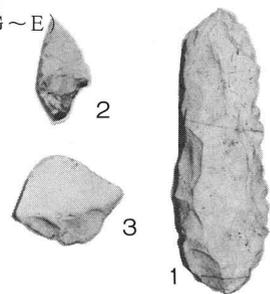
Fig 149 Ⅵ区土層図① (1/40・1/80→G~E)

3. 遺構と遺物

a. 旧石器時代

Ⅵ区出土の旧石器時代遺物として、ナイフ形石器、石斧状石器、使用痕のある剥片がある。(Fig 151・PL68)

1は不定形の部厚い剥片の両面から粗い加工を施す。断面は五角形状(一部菱形)を呈する。表裏ともに若干の自然面が残る。全長16cm、全幅 5.2cm、最大厚 3 cmを計る。流紋岩製。表土除



PL 68 Ⅵ区出土石器①

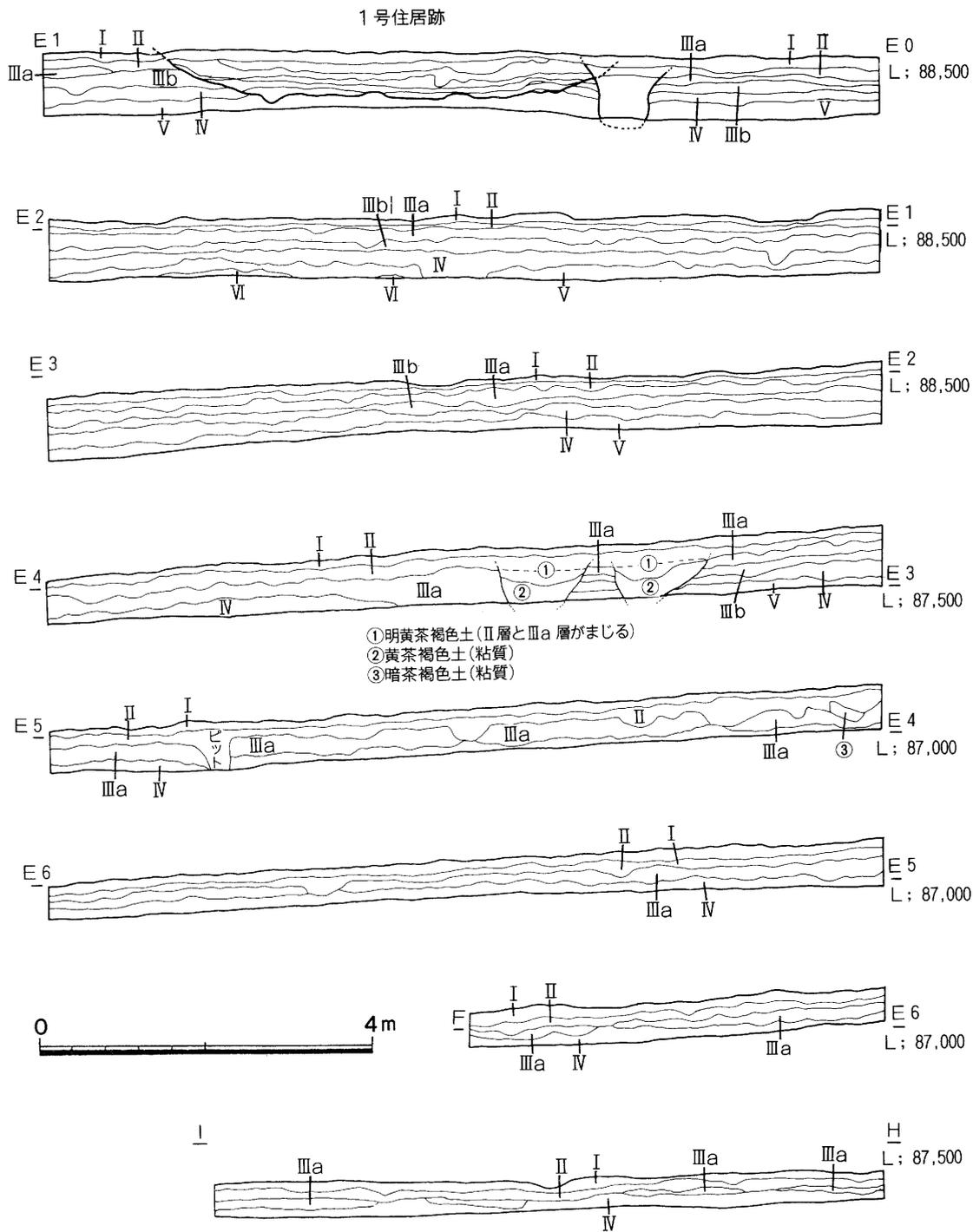


Fig 150 VI区土層図② (1/80)

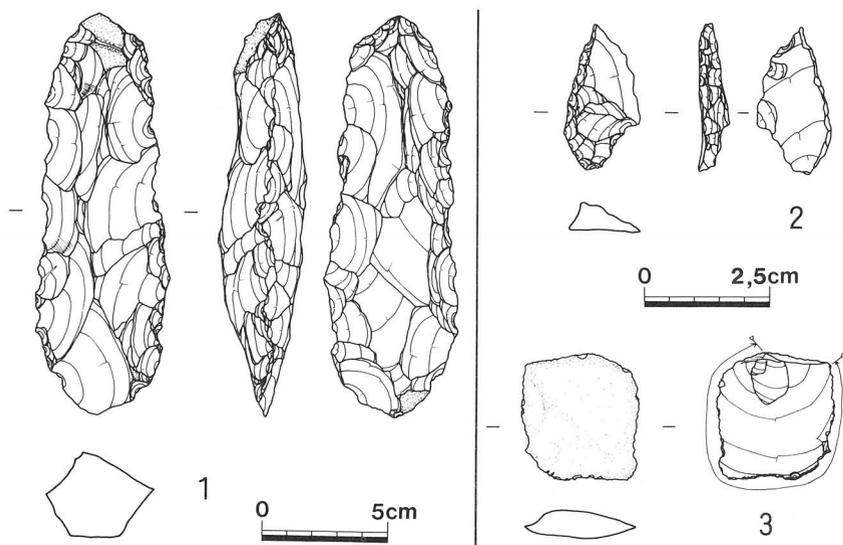


Fig 151 VI区出土遺物① ナイフ形石器等 (1/3・2/3→2・3)

去中アカホヤに混入した状態で出土。2は不定形の剥片の厚い方と基部の一部にブランチング加工を施すナイフ形石器である。刃部はゆるやかな孤状を呈す。全長2.9cm、全幅1.4cm、最大厚0.6cm、刃部長2.1cmを計る。流紋岩製。明確な出土層位は不明である。

3は石核から得られた方形の剥片の打面を除く部分に使用痕が認められる剥片である。全長5cm、全幅4.5cm、最大厚1.2cmを計る。流紋岩製。焼石内に混在。

b. 縄文時代

集石遺構 (Fig 152)

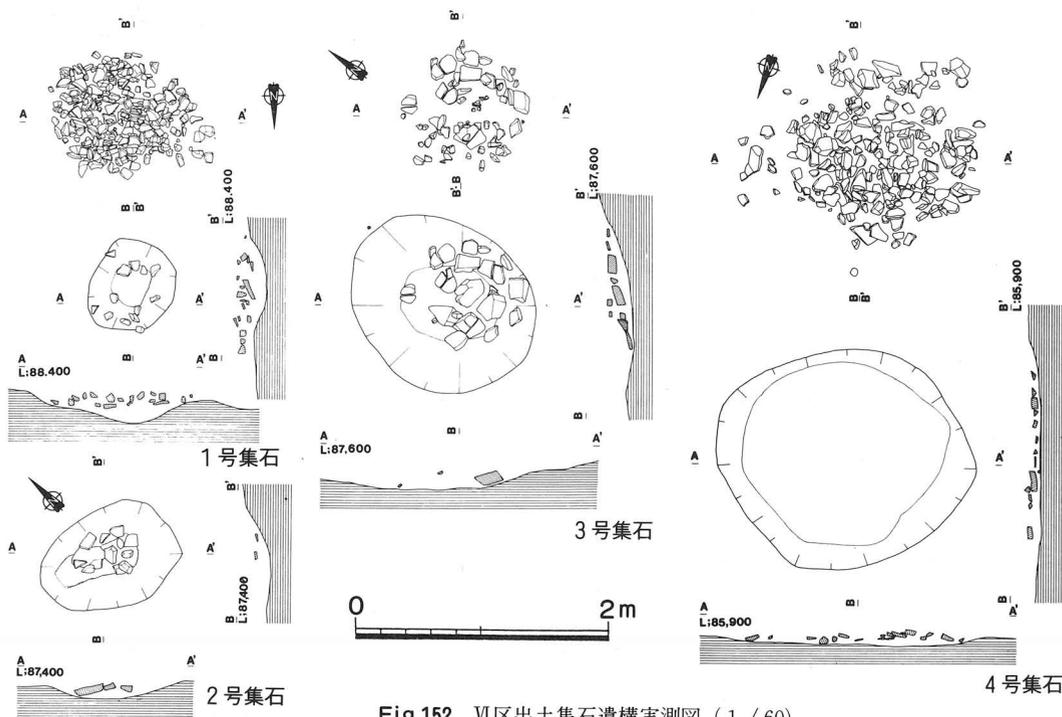


Fig 152 VI区出土集石遺構実測図 (1 / 60)

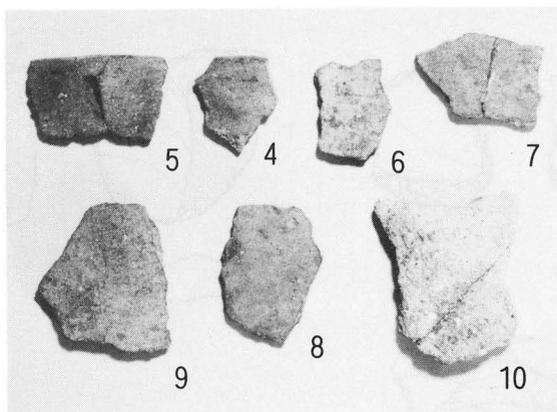
Ⅵ区ではアカホヤ層下より5基の集石遺構を検出した。1号集石・3号集石以外は敷石をもつ。敷石は2号集石・3号集石ともに浅い皿状を呈す。掘り込みは2号集石が細長い楕円形を呈す以外は円形である。4号集石は、掘り込み上面の直径が2mを超す大型である。Ⅵ区の集石遺構より出土遺物はない。

土器・石器 (Fig 153~155・PL69~70)

いずれもアカホヤ層下、焼石と同レベルで検出した。4-9は表裏ともに貝殻状痕を施すもので、表面はさらに指ナデにより平滑にしあげている。口縁部はやや外反する。端部は丸味を帯びる。

10は燃糸文土器である。やや器壁が厚い。表面にススが付着している。21は地鎮祭会場設営の為、傾斜部を平らにした後の排土中より採集したものである。口縁部が頸部からやや外側に開くタイプの楕円押型文である。口唇部内側に横方向の原体ころがしを施す。

10は使用痕を有する剥片である。打面には自然面を残し、やや縦長の剥片を利用している。全長7cm、全幅5.3cm、最大厚1.4cmを計る。流紋岩製。11と12はスクレイパーである。ともに不整形の剥片を利用し、12は一辺に、12はほぼ全周に細かい加工を施している。流紋岩製。13は石斧と思われる。一面の約半分



PL 69 Ⅵ区出土土器①

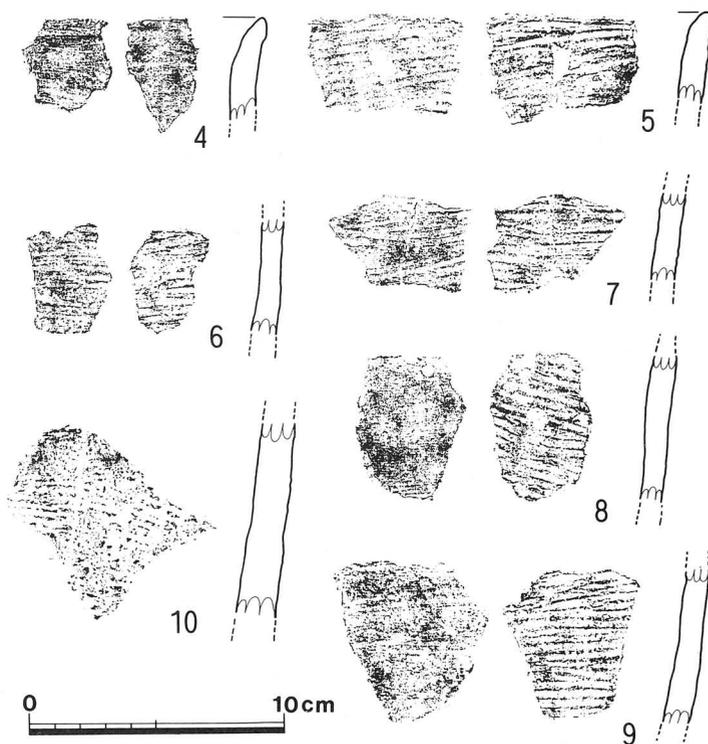


Fig 153 Ⅵ区出土土器①縄文土器 (1 / 3)

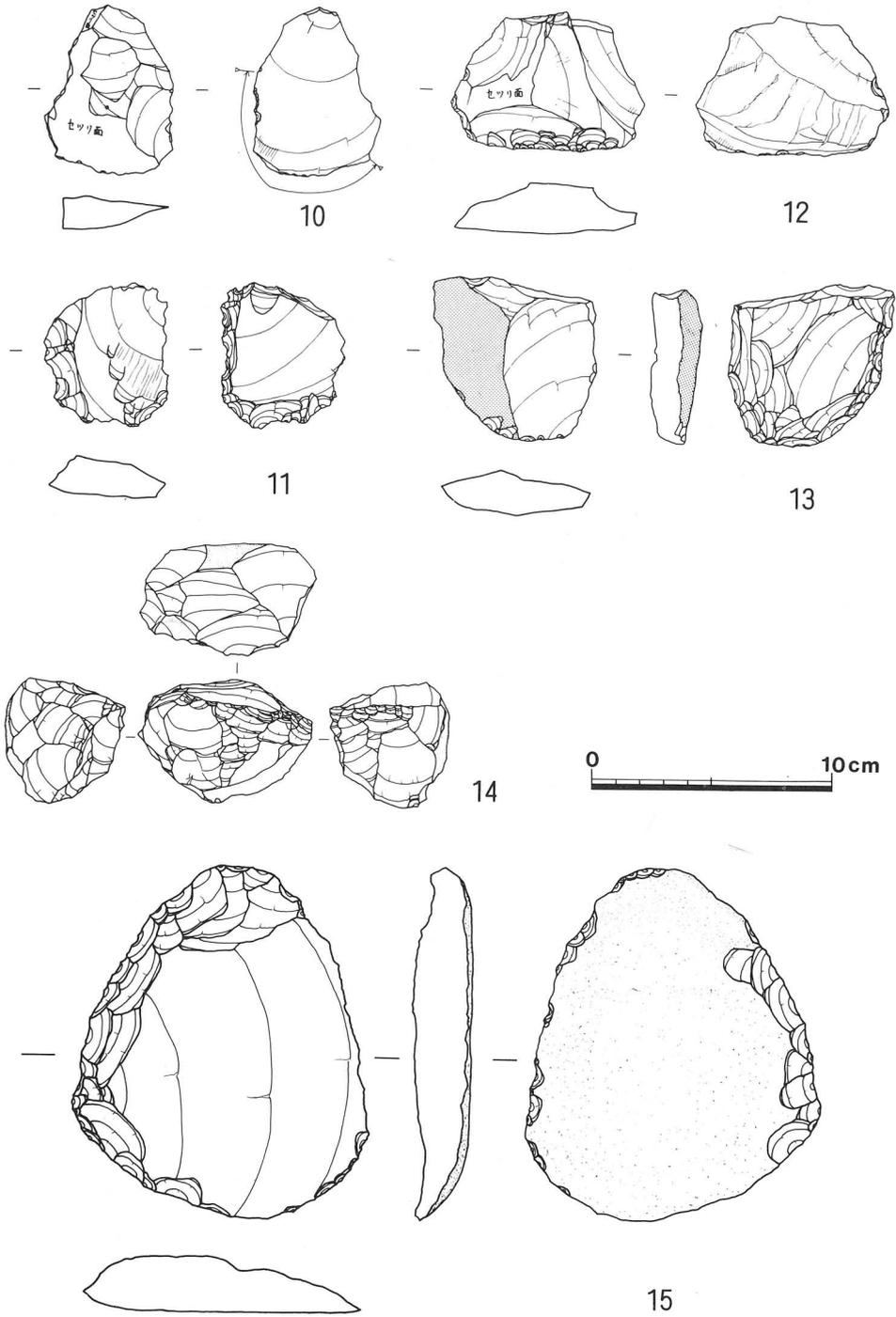


Fig 154 VI区出土石器②スクレイパー・石核等 (1 / 3)

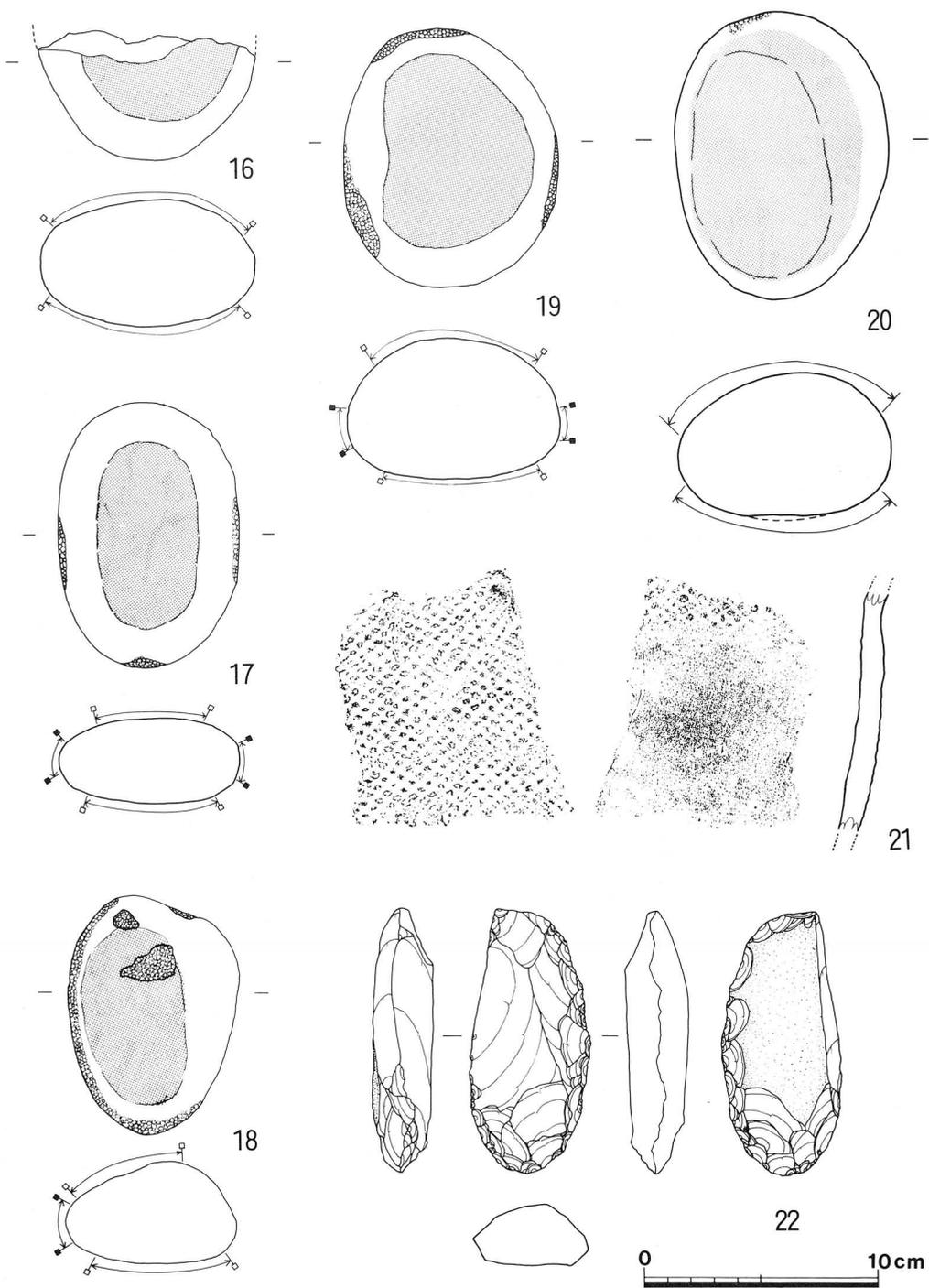
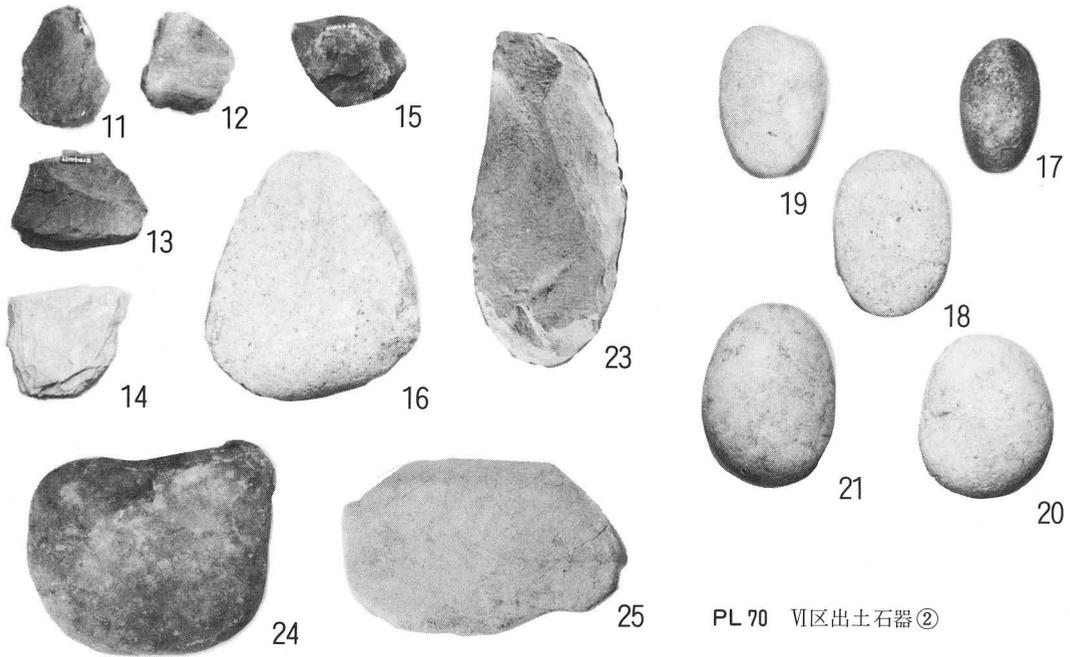


Fig 155 VI区出土石器③磨石·敲石·表採資料等 (1 / 3)

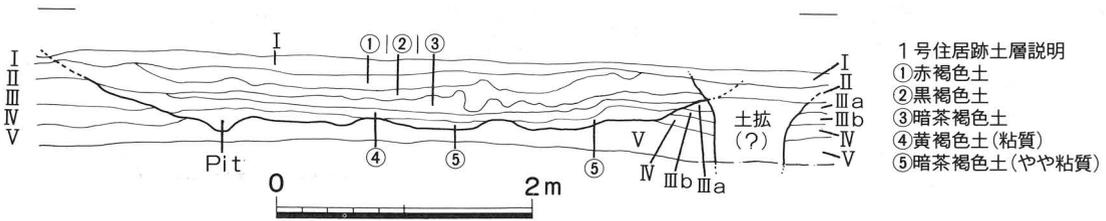


PL 70 VI区出土石器②

に丁寧な研磨が残る。反面は荒割のあと周囲に細かい加工を施している。使用痕は研磨した側に顕著に認められる。石材は安山岩質である。15は石核である。打面を次々に移動しながら剥片をとっている。打面調整は顕著ではない。流紋岩製。16は半面自然面を有する扁平な礫の周囲を荒く加工した礫器である。主要剥離面を残す。花崗班岩製。17～21は敲打器である。全部両面を磨石として利用している。その上、一端あるいは数ヶ所を敲石として利用している。19には上部に凹部が見られ、側面一帯に敲打痕が観察される。23は表採品（地鎮祭会場）であるが、半面に自然面を残す剥片を荒割りの後、三方に細かい加工を施す打製石斧である。また、一回の打撃により横部を除去している。石材は砂岩を利用している。24と25は石皿である。どちらも扁平な河原石を利用し、中央がやや凹む。石材は両方とも砂岩製。

c. 弥生・古墳時代 (Fig 157・PL71)

この時期の遺構として住居跡を一基（土層を確認）検出した。遺物として壺（26）が出土している。住居跡と26の間には若干距離がある。住居跡はⅢ層上面で 4.9m を計る。床からの立ち上がりはやや緩やかである。深さ10cm程の浅い柱穴がやや壁よりにつく。出土遺物はない。



- 1号住居跡土層説明
- ① 赤褐色土
 - ② 黒褐色土
 - ③ 暗茶褐色土
 - ④ 黄褐色土(粘質)
 - ⑤ 暗茶褐色土(やや粘質)

Fig 156 VI区1号住居跡 (1 / 60)

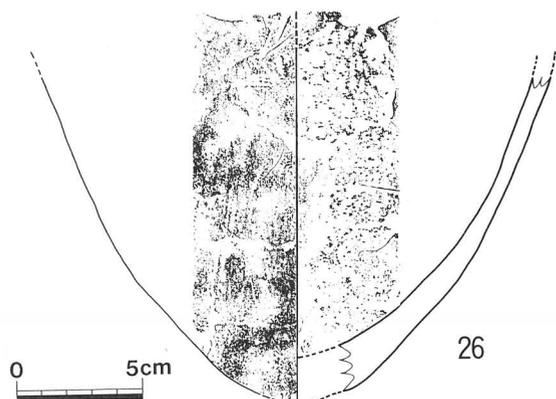
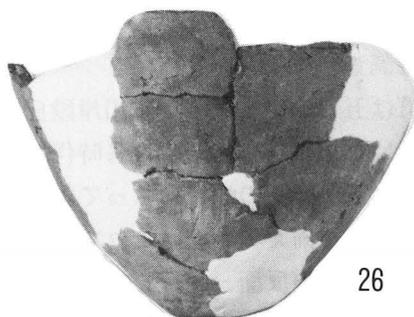


Fig 157 VI区出土土器②土師器 (1 / 3)



PL 71 VI区出土土器②(土師器)

横に土塚が掘り込まれるが、出土遺物がない為、時期等は不明である。26は底部と口縁が欠損している。正確な時期等は不明であるが、焼成胎土・あるいは表面に磨きが入ることから、他区の状態を踏まえても弥生終末～古墳時代初頭を大きくずれることはないであろう。

d. 近 世 (Fig 158、PL72～74)

VI区の北端に石塔を一基検出した。石塔は扁平な柱状を呈し、やや内傾する。表面は平滑に仕上げる。銘文等は不明。表土を剥いだところ、石塔の根元より寛永通宝3枚と非常に雑なつくりの土師皿片が数点出土した(27)。また、長軸 2.6m、短軸 2.4m、深さ 1mの円形に近い掘り込みを持つが、遺物等はなかった。



PL 72 VI区近世祭祀遺構検出状況(西より)

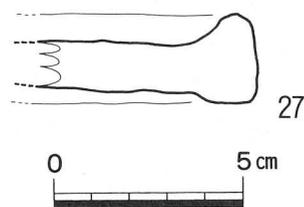
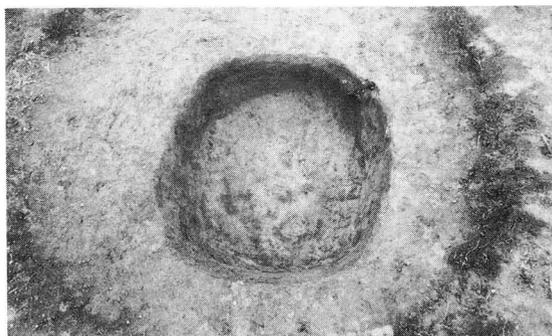
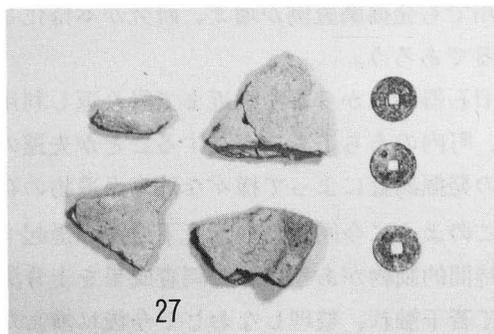


Fig 158 VI区近世祭祀遺構出土土師皿 (1 / 2)



PL 73 VI区近世祭祀遺構完掘状況



PL 74 VI区近世祭祀遺構出土遺物

第四章 ま と め

(1) 発掘調査の成果と問題点

北方町は五ヶ瀬川流域沿いに川岸段丘が発達し、ここを中心に人々の生活が営まれてきた。五ヶ瀬川はまた、物資と同時に各時代に亘って様々な文化を受け入れる受け皿でもあった。

そして、五ヶ瀬川の蛇行によって生まれた段丘は、古代から今日まで人々の生活にとって最高の立地条件を備えていた。これを物語るかのように、北方町の遺跡の多くはこの段丘上に位置している。その反面、蛇行を繰り返す五ヶ瀬川は、経済活動の中心が陸上交通に移った今日においては重要なネックにもなっている。しかし、相次ぐ開発の波から消えていった平野部の遺跡から比べれば、北方町の遺跡は周知の割りには非常に残りが良いという特徴を持っている。

本町の考古学的調査も昭和41年の菅原洞穴、昭和43年岩土原遺跡の発掘調査以来跡絶えて久しいものであった。今回の調査によって、岩土原遺跡の南側に位置する5つの丘陵上を完掘する結果となり、試掘調査時の予察をはるかに上回る成果をもたらした。

発掘調査では門川町との境に屏風のようにそそり立つ尾根から北へ緩やかに伸びる低丘陵上に集石遺構群、竪穴住居跡・土塚・溝・掘立柱建物群等の集落性遺構と五輪塔群・組石遺構・祭祀遺構等を検出した。このうち、150基を越す集石遺構は豊富な出土遺物と相俟ってこの地域に於ける縄文後代早期の一様相を垣間見ることができたと言えよう。また、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴住居跡の存在は、五ヶ瀬川流域沿い山間部と平野部のあいだの集落のあり方を知る上で貴重な初見資料を提供した。標高90m前後の丘陵上に位置する笠下遺跡の周辺には真近に山が迫り、丘陵間には狭小な谷部が存在する。こうした立地条件では僅かな可耕地しか望み得ず、稲作以外の生産手段に重要なウエイトを置いていたことが石庖丁が一点も出土しなかったことから窺がえる。さらには、中・近世のおびただしいピット群・土塚・溝・掘立柱建物群や五輪塔群・組石遺構・祭祀遺構は、丘陵上の一つの独立した村の存在を喚起させるものである。それから組石遺構・祭祀遺構及び五輪塔の墨書などは密教あるいは修験道と何等かの繋がりを示唆するものである。しかし、県下でも類例が少なく詳細な見当は今後の課題としたい。本町に於けるこの時期の文献資料がなく不明な点が多いが、最近宮崎や九州でも発掘調査例が増え、研究が本格化しつつあるので、類例がませば更に詳しいことが分かるであろう。

旧石器時代からごく最近まで繰り返し利用されてきた笠下遺跡のような立地条件を持つ類例は、町内のあちこちに存在することが先達の地道な表採活動で明らかになっている。また、今回の発掘調査によって様々な外来系遺物の存在も明らかになった。

このように今回報告した笠下遺跡の提起する問題点は、複雑・多岐に亘るが、莫大な遺物量や時間的制約があり、その調査成果を十分深化しえなかった。ここではいくつかの問題点について若干触れ、整理しなおして今後に備えたいと思う。

(2) 旧石器時代の遺物について

現在のところ、宮崎県下の旧石器時代の遺跡は80ヶ所余りが確認されている。そのうち発掘調査が行われたものは20ヶ所近くになる。五ヶ瀬川流域沿いでは、発掘調査が行われた日之影町出羽洞穴・北方町岩土原遺跡・延岡市赤木遺跡・同地藏ヶ森遺跡などのほか、周辺台地上の数ヶ所より旧石器時代の遺物が採集されている。そして、その時期は日之影町出羽洞穴の例を除けば、いずれもA T上位の後期旧石器時代に属するものばかりである。^{注1}

笠下遺跡では、旧石器時代の出土遺物としてナイフ形石器2点・剥片先頭器1点・石斧状石器1点・石核2点・スクレイパー2点が出土した。しかし、そのいずれもが焼石群や住居跡内あるいは排土中と言った出土状況を示し、明確な出土層位の把握ができなかった。

このため、やや正確な時期決定に欠く嫌いがあるが、堂地西遺跡出土例に見られるような分厚い小形三角形の二側縁加工のナイフ形石器の存在から、A T堆積以降と考えられる。^{注2}

また、小型の切り出しタイプのナイフ形石器の存在や基部加工を念入りに施し突く・切る・削るといった種々の機能を意識した剥片先頭器は、ナイフ形石器の終末期に位置づけられると思われる。^{注3}

石斧状石器についてであるが、一部自然面を残し、表裏とも粗い剥離に止め、結果的に分厚い◇状を呈する形態は、日之影町出羽洞穴や佐賀県多久茶園原遺跡・同三年山遺跡出土の先頭器類にも見受けられない。^{注4} アカホヤ層除去作業の折り出土した状況も考慮に入れて、細石器文化期のものか、あるいはそれに近い時期が考えられる。今後の同例資料の増加を待って再検討を加えてみたい。

最近延岡市の片田地区で発掘調査が行われ、A T直上から細石器段階にかけての良好な資料が層位的に出土している。詳細な報告が待たれるところである。

注1 宮崎県『宮崎県史資料編 考古1』1989

注2 宮崎県教委員会「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』1985

注3 注1に同じ

注4 西村隆司「茶園原遺跡—佐賀県多久市所在尖頭器出土遺跡調査概要報告」

『多久市文化財調査報告書』第4集(1979)

(3) 縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺構としてアカホヤ層の下より150基を越える集石遺構を検出した。その全てが、掘込みを持っている。集石遺構の出土遺物は土器類が押型文土器・貝殻文円筒土器・吉田系土器・燃糸文土器・無文土器、石器類が石鏃・石斧・使用痕を有する剥片・スクレイパー・磨石・敲石・凹石・石皿等縄文早期に普遍的な遺物類は大体出土している。大分県天瀬町平草遺跡例^{注1}に見られるような時期によってタイプが異なる傾向はない。(Tab 4・9・10参照)

また、芳ヶ迫遺跡^{注2}に見られるような集石遺構と礫群との関係は、ちょうど中・近世遺構が集中する部分と重なるために即断はできないが、集石遺構と礫群(焼石)及び遺物はセット関係を成すものと思われる。

空間域(遺跡内における時期および位置関係)については、現在のところ全ての遺物にわた

って分析を行っていないので詳細は不明であるが、台地内・台地間における時期差・セット差はあるようである。Ⅰ区～Ⅲ区では押型文土器が優勢である。Ⅳ区では押型文土器（早水台・田村・手向山など）、貝殻文円筒土器の出土例が多く、撚糸文土器や無文土器がその次に出土する。Ⅴ区では貝殻文円筒土器の出土例が多く、押型文土器・無文土器等が次に出土する。その他、平椀式土器や吉田系土器はⅤ区以外で出土例はない。Ⅵ区では条痕文土器がほとんどである。（表採品を除く）

石器では鋏形鋸・尖頭状石器・半面に自然面を有する扁平な砂岩製の礫器・環状石斧など縄文早期の特徴的な石器は大体出土している。このうち砂岩製の礫器は石材・形態・使用痕の観察等から土掘具等の機能が考えられる。

石材は祖母・傾山系の流紋岩及びチャートが大半を占め、希に佐賀県腰岳産黒曜石、大分県姫島産黒曜石が混じる。その他頁岩・砂岩・花崗班岩・凝灰岩は、五ヶ瀬川の河原や遺跡周辺で手に入る。^{注3}

注1 天瀬町教育委員会「平草遺跡」『大分県日田郡天瀬地区遺跡群発掘調査報告書』1982

注2 田野町教育委員会「県営農地開発事業(前平地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、芳ヶ迫第1遺跡、第2遺跡、第3遺跡、札ノ元遺跡」『田野町文化財報告書第3集』1986

注3 延岡市舞野町松田正利氏の御教示による。

(4) 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物について

五ヶ瀬川流域に於ける弥生時代～古墳時代の住居跡調査の初例は1966年に行われた延岡市貝の畑遺跡^{注1}であり、5.1m×3.85mの隅丸方形の竪穴住居跡を検出している。調査者は弥生時代後期後葉に比定しているが、出土した小形丸底壺より古墳時代初頭と思われる。次は1977年に行われた延岡市野田町八田遺跡例^{注2}で、変形した方形の竪穴住居跡を検出している。出土した櫛描文の安国系二重口縁土器などから弥生時代後期後半期に比定されよう。

その後、調査は途絶え、笠下遺跡が三例目になるが、最近（1990年3月現在）延岡市中尾原遺跡、高千穂町宮の前遺跡などで同時期の住居跡が調査されている。いずれも報告書が未刊のため、ここでは触れないことにする。

笠下遺跡では土層断面による確認を含め13基の竪穴住居跡を検出した。時期を明確に決定する良好なセット関係での出土遺物が無いため、現段階では他地域の資料と先輩諸氏の御教示を参考に大まかな編年案を提示するに止どめる。（Tab 11）

注1 石川恒太郎「宮崎県延岡市貝の畑遺跡」『日本考古学年報』19日本考古学協会 1971

注2 延岡市教育委員会「野田町八田遺跡」『日向・延岡新産都市計画道路西階通り線(市道)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1978

(5) 中・近世の遺構と遺物について

笠下遺跡では、五輪等の石塔や明銭などを埋納する祭祀関係の遺構及び遺物、溝・掘立柱建物・土壇など生活関係の遺構及び遺物を検出した。宮崎県では学園都市の調査を契機にして、最近のこの時期の調査例の増加には著しいものがある。しかし、研究はようやく端緒につ

いたばかりであり詳細は今後に期したい。

笠下遺跡で検出した墨書を有する空風輪、獣骨と明銭を一緒に埋納すること、組石遺構の存在などから密教あるいは修験道に何らかの関係があるのではとの示唆があった。^{注1}

台地上の溝状遺構の性格は①区画割り・②防衛的施設・③排水路等が考えられる。台地の縁辺を走り周囲にピットを有するⅣ区2号溝や異状に深いⅣ区1号溝は②の機能が考えられる。台地を縦横に走る溝や端がいくつか繋がったもの(Ⅳ区3・7・11・12・13号溝等は①と③の機能を兼ね備えたものと考えられる。そして、その機能を失ったものは1号溝のように単なるゴミ捨て場になったと思われる。

炭・焼土が多量に詰まる土坑(Ⅳ区7・8・12・18・19・20・21号土坑、Ⅴ区4・6・7号土坑)は遺物などが少なく機能等は不明であるが、周囲より出土した若干の水晶・石英片より、鍛冶に関係する施設ではないかとの指摘を受けた。^{注2}

出土陶磁器には12世紀代～1800年代と広い時期差があるが、14世紀中頃～15世紀中頃と1600年代の遺物が最も多く、遺構の多くはこの時期のものと思われる。

注1 延岡市天福寺住職桑井弘準氏の御教示による。

注2 延岡市舞野町松田正利氏の御教示による。

Tab 11 笠下遺跡編年案(弥生、古墳時代)

時期 区	笠下Ⅰ期(弥生時代終末期)	笠下Ⅱ期	笠下Ⅲ期(古墳時代初頭)	笠下Ⅳ期(古墳時代中期)
Ⅰ区	4・6号住居跡	2号・3号住居跡	1号住居跡	
Ⅳ区			5号土坑	
Ⅴ区	1号住居跡		2・3号住居跡	5号住居跡
Ⅵ区			No.25	
根拠	ハケ目、底部にわずかに稜がつく。	底部の稜不明瞭、ミニチュア土器	タタキ、底部丸底化、ミニチュア土器	土師椀より



PL 75 造成開始……………

笠 下 遺 跡

発 行 日 1990年3月31日

編 集 ・ 発 行 北方町教育委員会

印 刷 クラフト印刷

宮崎県東臼杵郡北方町子4146
電話 (0982) 47-3210番